新潟県中学校教育研究会

令和７年度　指定研究（２年次）

成果の概要報告書・資料

社会・理科・英語・音楽・保健体育・学校保健

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）

（音楽・保健体育・学校保健は指定の２地区のみ）

令和６・７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　石塚　貴希
（学校名：　　柏崎市立第五中学校　　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　　社　会

２　郡市名　　柏崎市刈羽郡　　３　会場校　　柏崎市立松浜中学校

４　研究主題

「当事者意識のある深い学びを実現させる授業の工夫」
～他者と協働し、粘り強く最適解を探究する課題解決を通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

①主題設定の理由

本研究では学習指導要領改訂の経緯や趣旨を踏まえ、研究主題及び研究内容の検討を新潟県中学校教育研究会社会科部上越地区研究推進委員会（以下、上越地区研究推進委員会）において積み重ねた。研究推進委員から様々な提言や意見が出され、特に「主体的・対話的で深い学び」に関わる日々の授業実践や生徒の姿等から次に示す課題が共有された。

・生徒の問題意識や追究意欲を高められないまま、課題解決に向けた学習が展開される。
・協働的な学びが、「対話の深まり」に発展しない。
・振り返りやまとめの段階で、生徒の個々の「思いや考え」が表出されていない。

上越地区研究推進委員会では、これらの課題の背景に、生徒の学習意欲を喚起する課題が授業で提示できていないことや深い学びにつなげる有効な手立てや働きかけが不十分であることが影響していると分析した。特に、協働的な学びにおける解決や探究の対象となる課題を、生徒が自分の問題として十分に認識していない点について、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりの改善点であると捉えた。同時に、他者と協働し対話を積み重ね、自分たちの現実に即した最適解を粘り強く探究すること、すなわち「当事者意識をもつ」ことは、「主体的・対話的で深い学び」を促進させるとともに、新学習指導要領が示す「主体的に社会の形成に参画する力」の育成へと結び付いていくと考える。

以上の理由から、本研究では、主体的に社会の形成に参画する力を育成するために必要な「主体的・対話的で深い学び」を実現させる授業づくりとして、社会的事象を自分事として捉える「当事者意識」をキーワードに、他者と協働して粘り強く最適解を探究する課題解決型の単元を開発し、手立ての有効性を分析・検証することとした。

②目指す生徒の姿

本研究における目指す生徒の姿を、上越地区研究推進委員会が目指す研究の方向性と会場校の生徒の様子や協働的な学びの実態を踏まえ、次のように設定した。

○他者と協働し対話を積み重ね、最適解を粘り強く探究する生徒
○社会的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察する生徒
○自身の現実生活に即した（当事者意識をもつ）社会参画の具体を模索する生徒

6　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

下記の４点を重点技法に位置付けて、深い学びにいたる授業づくりに取り組んだ。

設定の過程	深い学びの技法①「学んだ知識を活用して課題や目標を設定する」
思考の過程	深い学びの技法⑤「資料やデータに基づいて考察したり検証したりする」 深い学びの技法⑧「異なる多様な考えを比較して考える」
解決の過程	深い学びの技法⑨「学んだ知識や技法を活用して思考や表現をする」

（１）設定の過程（深い学びの技法①）

・課題解決型の学習過程を中核とし、生徒が追究・解決したくなるような課題を単元全体の学習課題として設定する。本実践「地方自治」の単元を貫く課題を、『柏崎市がこれからも住み続けられるまちでいるためには、どんなことが必要だろうか』とした。

・今起きている身近な社会的事象と現実の生活をつなぎ、生徒が考えたい、解決したいと思える課題を設定する。課題の提示において、「どのようにすべきか」「今後どうしていけばよいか」といった自ら選択・判断する問いかけをし、生徒の意見や考えが想起しやすいように工夫する。研究発表会当日の学習課題を「柏崎市が推進するコンパクトシティ政策をより良い方向に進めるには、どうしたらよいだろうか？」と設定した。

（２）思考の過程（深い学びの技法⑤・⑧）

・コンパクトシティ政策のメリット・デメリットを整理し、政策の妥当性について、「効率・公正」の視点から検証を行い、コンパクトシティ政策を推進する上での課題を焦点化させる。

・グループ内での意見交流や各グループで検討したアイデア（解決策）を、小集団や学級全体で発表し合いアイデアの違いに触れる。その際、視点や立場を基に学び合いを行う。

（３）解決の過程（深い学びの技法⑨）

・学び合いを参考に、自分なりの考え（解決策）をまとめ柏崎市への提案書を作成する。

（４）その他（思考の過程に関連して）

・協働的な学びを深い学びにつなげるためには、意見交流や議論により広がった思考を再構成させ、新たな気付きや発見及び疑問を喚起させる授業者のさらなる「ひと工夫」が必要になる。本研究における具体的な「ひと工夫」の視点は以下のとおりである。

○「本当にそうだろうか」「本当に良いのか」等の問いかけや揺さぶり

○考える視点や社会的な見方・考え方を示し、それらを基に吟味・検討の場面の設定

7　研究の成果と課題

・自分の問題として捉えやすい学習課題の設定や単元構成によって、当事者意識をもって追究意欲をもって学習に取り組む姿が見られた。

・新たな気付きや発見及び疑問を喚起させる授業者の机間指導（補助発問）により、議論の活性化が促され、現実に即した最適解を生み出そうとする粘り強い学習活動に結びついた。

・グループ内でアイデアを練り上げる際、立場や視点を示すことで思考の方向付けや考えやすさにつながった。一方、似たようなアイデアに偏り思考の広がりの面では課題が残った。

・議論の深まりや個人・集団の思考をさらに促すためには、生徒の考えを拾い上げ、繋げ広げるといった授業者のファシリテーターとしての技量をさらに磨いていく必要がある。

8　運営の成果と課題

・研究推進委員からプレ授業を協力的に行ってもらうなど、研究主題の達成に向けて活発な議論を重ねることができた。生徒の学ぶ姿や授業の在り方について、たくさん語り合うことができた。

資　料

1　部会名　社　会

2　郡市名　柏崎市刈羽郡　　3　会場校　柏崎市立松浜中学校

4　研究会開催期日　令和７年 11 月 18 日（火）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	刈羽村立刈羽中学校　校 長	後藤　純二
(2) 研究推進責任者	柏崎市立第五中学校　教 諭	石塚　貴希
(3) 会場校責任者	柏崎市立松浜中学校　教 頭	土田　貴宏
(4) 県･郡市指導主事	柏崎市教育委員会　指導主事	近藤多計夫
(4) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立松浜中学校　教 諭	伊佐　勝
	柏崎市立第二中学校　教 頭	吉原　裕介
	柏崎市立鏡が沖中学校 教 諭	佐々木太耀
	柏崎市立東中学校　教 諭	松田　涼
	刈羽村立刈羽中学校　教 諭	後藤　弦

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/26　松浜中学校	7	新年度の活動計画、研究主題と手立ての確認、授業構想について
2	8/20　松浜中学校	7	Class の原稿検討、単元構想と指導案の検討①
3	10/3　松浜中学校	8	指導案の検討②、研究発表会当日の日程と協議会のもち方について
4	10/30 鏡が沖中学校	7	研究推進委員によるプレ授業 授業者：佐々木　太耀　教諭（２年　地理的分野） 授業の検討会、指導案の修正、研究発表会当日の役割分担について
5	11/18 松浜中学校	8	研究発表会
6	12/12 松浜中学校	8	今年度の総括（成果と課題）

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（４３）名	(3) 小学校・高等学校教員　（１）名
(1) 郡市内中学校会員　（２０）名	(4) 教育委員会・センター　（２）名
(2) 他郡市中学校会員　（４）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（０）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年Ａ組	民主政治と政治参加　「地方自治と住民の参加」 ～コンパクトシティを考える～	伊佐　勝

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第１分科会	①研究主題に迫ることができたか ②そのための手立ては有効であったか	柏崎市教育事務所 指導主事 近藤　多計夫　様	柏崎立第二中学校 吉原　裕介教頭	当校教諭 伊佐　勝

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　金泉　翔
（学校名：　長岡市立寺泊中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　中越地区・社会科

２　郡市名　長岡市・三島郡　　３　会場校　長岡市立栖吉中学校

４　研究主題

公民としての資質・能力の基礎を育成する学習指導の工夫
～「構造化された問い」と自らの価値や行動を決定する活動を取り入れた授業実践～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

（１）主題設定の理由

生徒の「公民としての資質・能力の基礎」が育成され、且つ生徒の深い学びとなるための手立てとして①「構造化された問い」を設定することと，②生徒が「自ら価値や行動を決定する活動」を取り入れた授業を行うことの二つを設定する。

社会科において「問い」を設定することは，生徒が探求的に学習を進める動機づけになる非常に重要な作業である。その「問い」を構造化することで，単元レベルでの問いの系列化をすることができ，一つ一つの授業づくりが３年間の社会科の授業を通して達成すべき目標へとつながる。また，生徒が「自らの価値や行動を決定する活動」を授業に取り入れることは，「問い」に対して生徒が社会的な見方・考え方を働かせて深く考える活動へとつながる。意思決定する場面では，他者と協働したり，意見交流をしたりするなど様々な活動が考えられる。

（２）目指す深い学びの姿

個別の歴史的事象を学んだ上で、その中から自ら課題を発見する力や、自ら発見した課題を自ら解決する力も育むことを目指す。個別の歴史的事象を学ぶ際には、「構造化された問い」を解決していくことで学びを深めさせたい。その学びの深化においては、単元内自由進度学習を取り入れ、個別的、協働的な学びを進めていく。自ら課題を発見したり、その課題を解決する段階においては、自分の意見と他者の意見を比較し、情報を取捨選択し、多面的・多角的に考察し探究する生徒の姿を目指す。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

（１）研究の方法

＜設定＞

「深い学びの技法」の No.①「学んだ知識を活用して課題や目標を設定する」

生徒は単元内で学んだ既有の知識を活用して、新たな課題があることに気付き、その課題解決に向けて思考するようになる。

＜思考・解決・表現＞

「深い学びの技法」の No.⑦「視点の転換や逆思考をして考える」

設定の過程で新たな課題を発見し、解決に向かうことができた生徒は、歴史的事象の全てが良い方向に進んだわけではないことに気付き、新たな視点で歴史を見つめるようになる。

「深い学びの技法」の No.⑮「自分の言葉で学んだことを整理しまとめる」

生徒は、本や資料をそのまま要約するのではなく、既有知識を活用して自分なりの言葉や表現を工夫して書いたり話したりすることで、より深い学びにつながっていく。

（２）研究の内容

① 深い学びに至るために、「本質的な問い(Essential Question)」を「単元を貫く問い」として設定し、各授業の「中心発問(Main Question)」でそれぞれの学習課題に迫り、授業中の「補助発問(Sub-Question)」で生徒の思考を促しながら授業を進める。これら、「構造化された問い」を設定することで、深い学びへとつなげ、さらに「探究したい」という主体的な学びへとつなげる。

② 単元の中に自らの価値や行動を決定する「価値判断」や「意思決定」の場面を設定する。「価値判断」や「意思決定」は、事実的知識を活用して、獲得した概念をもとに、社会的な見方・考え方を働かせて判断を行うことになるため、深い学びへとつながると考える。

③ 単元の特性に応じて、「学びの技法」を取捨選択・活用し、「価値判断」「意思決定」の活動を行う。

④ 「本質的な問い」を中心とした「構造化された問い」を設定すること、単元内に「価値判断」や「意思決定」の場面を設定することで、「公民的な資質・能力の基礎」の育成が果たされるかどうかを検証する。

7　研究の成果と課題

（１）成果

・１年次より、「自分の考えをもつ」、「他の意見を聞く（取り入れる）」する場面を意図的に設定し展開することができた。生徒たちが自分の立場や相手の立場を意識して交流することができ、多面的・多角的に事象を捉えることができたと思われる。

・１年次の反省から、スモールステップで問いを解決していくことで、単元を貫く課題に迫れるように工夫することができた。

・単元別自由進度学習を取り入れたことで、多くの参観者が関心をもって考え、協議会でも多くの意見をいただくことができた。また、単元別自由進度学習の課題についても共有することができた。

（２）課題

・少人数の班の中で４つの立場に分かれて事象について考えたが、自分で立場を選んでまとめられると、より選んだ立場にこだわりをもって取り組めたのではないか。また、自分で選んだ立場ではなかったため、他の意見を聞いて共感することはできても、批判的な見方までには至らなかった。

8　運営の成果と課題

（１）成果

・公開授業前の研究の概要説明の際に、授業のポイントについて説明し、参観者がどこを見て、どの点を協議会で話し合いたいのかを丁寧に示したことで、協議会で多くの意見が出ることにつながったと考えられる。

・これまでの研究に関わる様々な公開授業（研究推進委員が行った授業等）をまとめて貼り出すことで、参観者が多くの授業の取組を知るきっかけとなった。

（２）課題

・研究会当日の動きについて、研究推進委員会と会場校とのやりとりに改善すべき点があった。当日の会場の準備や表示、駐車場等の設定や係の分担等を会場校が担うことが多くなってしまい負担をかけてしまった。

資　料

1　部会名　中越地区・社会科

2　郡市名　長岡市・三島郡　　3　会場校　長岡市立栖吉中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11　月　27　日（　木　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	長岡市教育センター・指導主事	植木　朋弘
(2) 研究推進責任者	長岡市立寺泊中学校・教諭	金泉　翔
(3) 会場校責任者	長岡市立栖吉中学校・教諭	笠輪　敬
(4) 県･郡市指導主事	魚沼市立広神中学校・校長	小森　一秀
(4) 研究推進委員(授業者)	長岡市立栖吉中学校・教諭	笠輪　敬
	長岡市立宮内中学校・主幹教諭	阿部　信也
	長岡市堤岡中学校・教諭	古川　夏希

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5月9日／栖吉中学校	5	・1年次発表の成果と課題の共有 ・2年次発表のテーマについて ・今年度の日程の確認と見通し
2	5月30日／栖吉中学校	4	・全県部会の情報共有 ・プレ授業の指導案検討 ・class の原稿の検討
3	8月7日／栖吉中学校	4	・全県部会の情報共有 ・プレ授業の成果と課題 ・class の原稿の最終確認 ・今後の推進委員の公開授業の指導案検討
4	11月4日／栖吉中学校	5	・推進委員の公開授業の成果と課題 ・本発表の進行状況と本時の指導案検討 ・当日の運営面の確認と共有
5	12月18日／栖吉中学校	5	・本発表の成果と課題 ・2年間の研究のまとめと振り返り ・次の研究に向けての引継内容の整理 ・旅費の確認と受け渡し
6			

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　63　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　2　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　42　）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　11　）名	(5) その他（教科書会社社員）　（　7　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年2組	日本の近代化と国際社会～明治維新と立憲国家への歩み～・明治維新による変化を様々な立場から考える	長岡市立栖吉中学校教諭・笠輪敬			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	①本実践の手立てが、「公民としての資質・能力の基礎の育成」に有効であったか。 ②「生徒が主役になる」授業や単元づくりとして、本実践が有効であったか。また、他にどのような手立てがあるか	長岡市教育センター 指導主事 植木　朋弘 様	長岡市立宮内中学校 阿部　信也　主幹教諭	当校教諭 笠輪　敬

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　木村　伸
（学校名：新潟市立葛塚中学校　　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　社　会

２　郡市名　新潟市　　３　会場校 1年次　新潟市立藤見中学校
2年次　新潟市立新津第五中学校

４　研究主題

社会認識を高め、これからを生き抜く力を獲得する生徒の育成
～学び合いを通して、子どもが自ら考え、判断し、表現できる授業の在り方～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

社会科の目標は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することである。また、現代の急速に変化を続ける社会を生き抜くため、生徒一人一人にとって自己決定し、自ら行動する姿勢が大切である。そのため、社会に対する関心を高め、社会事象の基本的な知識を身に付け、事象相互のつながりや因果関係について理解し、自分の考えをもちながら主体的に行動する態度や資質を身につけさせたいと考え、上記の研究主題を設定した。

生徒一人一人が自己を客観的にとらえ（認知し）、他者とかかわり合いながら考えを広げ深める協力的な学習活動や、思考を表現に置き換えたり、多様な手段で説明したりする生徒を目指していく。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

「単元を通したねらい」を達成するために、「深い学びの技法」を活用し、社会的見方・考え方を深めていく。

（１）住民の願いや思いに基づいて単元を貫く課題を設定する。（技法②）

・ゲストティーチャーから「新津の魅力」「新津の課題」「新津の活性化」を聞くことにより、生徒は自分が住む町の魅力や問題点に気付き、単元を貫く課題「新津を活性化させるためには、私たちにできることとは」を自分事としてとらえ主体的に学習に取り組めるようにする。

（２）話し合いや学び合いを通して異なる多様な意見を比較して考える。（技法⑥⑨⑩）

・新津の活性化について、地域の方との対談や授業で学んだことを生かしながら、「新津活性化プラン」を多面的・多角的に考察しながら作成する。
・「新津活性化プラン」を生徒やゲストティーチャーに発表しアドバイスをもらうことで、より実現性を高めるための方法を知り、新津を活性化させるための具体的な考えをより深めることができる。

（３）理由や根拠を示しながら自分の言葉で学んだことを整理してまとめ、自分の人生との関わりについて考える。（技法⑬⑮⑲）

・「新津活性化プラン」について効率と公正の視点から評価することを通して、将来の住民として建設的な意見をもつことができる。
・学んできたことをまとめる活動を通して、将来の自分の行動について具体的な考えを構築することができる。

７　研究の成果と課題

成果

・ゲストティーチャーを招いて身近な地域の課題にともに考え、新津活性化プランを作成したことで、単元を貫く課題を自分事としてとらえることができた。また、生徒が一人の住人として自分の生活と重ねながらより主体的に学ぶことができた。
・ゲストティーチャーを行政、経済、消費者の立場から招き、それぞれの視点でアドバイスがうけ、班員同士で相談しながら新津活性化プランの修正を行ったことで、多面的・多角的に考察を行うことができていた。
・各分野のゲストティーチャーを活用したことで、地域学習の一番の課題である机上の空論に終わらせず、具体的な手段で実現性を高めることができた。
・総合学習と社会科の差別化をはかるために、単元の中で活動と知識の学習を並列して行ったり、効率と公正の視点から相互に評価を行ったりしてことで、社会科の見方・考え方を深めることができた。

課題

・総合的な学習における地域学習と社会科における地方自治は関連しており、何をどう結びつけていくのか、地域を社会科の中で学ぶ意味は何なのか、というところを考えながら指導案を作成し、授業を行った。しかし、「総合的な学習と社会科との差別化」をどのように実現していけば良いのかが、最後まで課題として残った。
・社会科の中で地域を学ぶ意義として、社会科的な見方や考え方を働かせて、社会的事象を捉えさせるために適切な視点を設定することが難しかった。今回の授業では、生徒がより取り組みやすくなるように「効率と公正」の視点を使った。しかし、授業後のアンケートでは「効率公正に捉われたせいでプランが経済的な効果をあげるものが多くなってしまっている」や「効率公正とは何か曖昧であり視点としては良くない」と意見があり、視点設定の課題が指摘された。

８　運営の成果と課題

成果

1 年次の藤見中学校、2 年次の新津第五中学校の協力で滞りなく運営することができた。新潟薬科大学の木村哲郎教授より、事前学習へのご指導、当日のご講演をいただいたことで、今回の授業実践をより深めることができた。

ロイロノートの資料箱を活用し、単元の授業内容や生徒の新津活性化プランの変容を提示することができた。

課題

新潟市でも県中教研の公開が 4 年に 1 回、担当するが、運営面の引継をどのように行っていくかが課題になってくる。

資　料

1　部会名　社会

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立新津第五中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11　月　6　日（　木　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟薬科大学・教授	木村　哲郎
(2) 研究推進責任者	新潟市立葛塚中学校・教諭	木村　　伸
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第五中学校・教頭	松本　康治
(4) 県･郡市指導主事		
(4) 研究推進委員（授業者）	新潟市立新津第五中学校・教諭	渡辺　美羽

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5／15／山潟中学校	6	今年度の予定、授業研究の方向性
2	8／4／新津第五中学校	7	指導案検討会
3	9／25／新津第五中学校	7	指導案検討会、研修の打合せ
4			
5			
6			

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　６６　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　６２　）名	(4) 教育委員会・センター　（　　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　１　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　３　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3年3組	地方自治と私たち	渡辺美羽			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	授業の成果と課題	新潟薬科大学・教授 木村　哲郎様	新潟市立葛塚中学校 木村　　伸教諭	当校教諭 渡辺美羽

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　高橋　保嗣
（学校名：　五泉市立五泉中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　下越地区・社会

２　郡市名　五泉市・東蒲原郡　　３　会場校　阿賀町立三川中学校

４　研究主題

資質・能力を育む深い学びにいたる授業の創造 ～社会的な見方・考え方を働かせる工夫を通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

研究推進委員会を発足させた際の話し合いで、学び合いの後に行われる生徒の発表の様子や個人レポートの内容を見ても、なかなか考えの深まりを感じることができない、といった意見が交わされた。具体的には教師がねらった思考に至らなかったり、感情を伝えるだけの表現で終始したりする点である。このような状況を課題として捉え、生徒の学びを深い学びへとつなげるためには、どのような手立てが必要かを検討した。そこで社会科の学習指導要領に立ち返り、社会科で身に付ける資質・能力を確認した。その中で、「社会的な見方・考え方を働かせた思考力、判断力、表現力等の育成」に着目し、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて思考できるような手立てを教師が講ずることで、深い学びが実現できると考えた。

また、研究推進委員会では、社会科で身に付ける資質・能力を「学んだ知識を使える力」「課題解決力」「社会形成に参加する態度」の３つと捉え、この３つを生徒が社会的な見方・考え方を働かせて身に着けることを深い学びの姿とした。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

（１）研究の方法

「深い学び」にいたるための手立てを３本柱として、提案授業によって手立ての妥当性を検証した。

（２）研究の内容（深い学びにいたるための手立て）

①自分ごととして捉える工夫

社会的事象に対して活発な思考を促すために、生徒の生活に身近な教材を提示し、課題を自分ごとと捉えさせる工夫をする。生徒は、さまざまな面と関連づけながら学習を進めていくことで社会的事象と向き合い、教材をより身近に感じて考えを深めていく。これにより、主体的に課題を解決しようとすることで、社会形成に参加する態度を育みたいと考えた。

（関連：県中教研「深い学びの技法」②）

②言語活動の充実

言語活動を充実させるには、話し合いたい、解決したいと生徒が思うような対話活動を促すための「問い」が必要である。社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を設定することで、感情論ではなく、より深まりのある話合いを促すことが期待できる。また、学び合いを促すために話し合いの形態や視点、使用するツールを工夫し、多面的・多角的な思考など社会的な見方・考え方ができるようにする。この手立てを通して、学んだ知識を使える力や表現力を育みたいと考えた。（関連：県中教研「深い学びの技法」⑨、⑩）

③深める問いの設定

生徒同士の対話を深い学びに向かわせるために、深める問いを投げかける。深める問いを「社会的事象の定義や本質を見いだす問い」「社会的事象同士の関係を見いだす問い」「汎用性を見いだす問い」ととらえ、見方・考え方を働かせて考えることを通して、課題を解決する力を育みたいと考えた。（関連：県中教研「深い学びの技法」⑦、⑧）

7　研究の成果と課題

提案授業の指導案検討から授業実践までの成果と課題を、研究の手立ての３本柱から振り返ってみた。

<table>
<tr><td colspan="2">（1）自分ごととして捉える工夫</td></tr>
<tr><td>＜成果＞
・家族やその立場の人とのやりとり
・立場設定（対話のツール）
・いろんな人の立場の設定
・政策を身近な人に評価してもらう
・胸のシールで立場の可視化
・一人ひとり違った立場を考えることがよかった</td><td>＜課題＞
・その立場になりきれていたか
（例）自分の考えから抜け出せない生徒
・立場設定ではなく、既習事項を生かして多面的な話し合いでもよかったのでは
・様々な世代の意見を聞くことが公正なのか</td></tr>
<tr><td colspan="2">（2）言語活動の充実</td></tr>
<tr><td>＜成果＞
・レーダーチャートを用いた、立場の違いの可視化
・提言書の練り直しやレーダーチャートの活用により、話し合いの視点がぶれなかった
・立場を設定して提言書を練り直すことで、意見の交換が行われていた（発表だけで終わらなかった）</td><td>＜課題＞
・レーダーチャートを使いこなせていなかった
（例）形の違いの着目が少なかった
なくても意見が言えたのでは
・レーダーチャートの着色や透明なシートの使用により比較する工夫がほしかった
・最後は少人数を生かして全員参加で話し合いをしてもよかった</td></tr>
<tr><td colspan="2">（3）深める問いの設定</td></tr>
<tr><td>＜成果＞
・深める問いの大切さが適正であった
・参画を答えている生徒が多かった
・自分たちが動かしていくという意識が育っていると、感じることができた
・自分にも何かできるかもと思わせることができていた
・生徒の今の立場での参加の仕方を考えることができた</td><td>＜課題＞
・阿賀町　→　地方自治をとらえるという汎用性を見いだせていたのか
・地方自治とは何かという点に至らなかった
・政治参加とは少し離れてしまっていた
・何をすることが地方自治への参加になるかわかっていたのか
・深める問いを思考する時間が少ないなど、もう少し課題追究する場面の工夫が必要と感じた</td></tr>
</table>

8　運営の成果と課題

○授業を推進委員全員で造り上げたこと（単元デザイン、本時の授業、参考に使う資料など）。

○授業者を全員でサポートできた（授業者の指導案を基に、意見の押し付けでなく意見の選択）。

▲一人一人の負担をもう少し軽減できればよかった。役割分担の細分化。

▲研究推進員会の回数と持ち方（全員で集まる時と少数で集まる時のバランス）。

資　料

1　部会名　下越地区・社会

2　郡市名　五泉市・東蒲原郡　　3　会場校　阿賀町立三川中学校

4　研究会開催期日　令和７年 10 月 29 日（水）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	阿賀町立三川中学校・校長	佐藤雅秀
(2) 研究推進責任者	五泉市立五泉中学校・教諭	高橋保嗣
(3) 会場校責任者	阿賀町立三川中学校・教頭	宮田雄介
(4) 県･郡市指導主事	下越教育事務所・学校支援第２課長	白澤道夫
(5) 研究推進委員(授業者)	阿賀町立三川中学校・教諭	頭川　玄
	阿賀町立阿賀津川中学校・教諭	香坂しおり
	五泉市立川東中学校・教諭	八木信己
	五泉市立村松桜中学校・教諭	片桐大地
	五泉市立五泉北中学校・教諭	石川美和

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5 月 22 日／三川中学校	7	研究の方向性の確認
2	7 月 29 日／五泉中学校	6	「深い学び」についての研修
3	8 月 4 日／三川中学校	3	指導案検討会①
4	8 月 20 日／五泉中学校	4	指導案検討会②
5	9 月 3 日／五泉中学校	7	指導案検討会③
6	9 月 16 日／五泉中学校	8	郡市中教研社会科部合同研修会
7	10 月 3 日／阿賀津川中学校	8	プレ授業（授業者：阿賀津川中学校　教諭・香坂しおり）
8	10 月 16 日／五泉中学校	7	指導案検討会④
9	10 月 21 日／三川中学校	4	研究発表会準備
10	10 月 24 日／三川中学校	4	研究発表会準備
11	10 月 29 日／三川中学校	9	研究発表会（公開授業・協議会）
12	12 月 5 日／五泉中学校	6	研究の成果と課題のまとめ

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	(32 名)	(3) 小学校･高等学校教員	(０名)
(1) 郡市内中学校会員	(16 名)	(4) 教育委員会･センター	(２名)
(2) 他郡市中学校会員	(14 名)	(5) その他（地域･保護者の方）	(０名)

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
３年１組	地方自治と住民の参加	頭川　玄			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	本時の授業で３つの手立ては生徒が深い学びにいたるのに有効だったか	下越教育事務所 学校支援第２課長 白澤　道夫　様	五泉市立村松桜中学校 片桐　大地 教諭	当校教諭 頭川　玄

令和６，７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　中野　祐輔
（学校名：　上越市立城西中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　理　科

２　郡市名　上越市　３　会場校　上越市立城東中学校

４　研究主題

課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

授業においては、「理科の見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたりすることが求められる。生徒が既習事項を振り返りながら考えることができ、主体的に探究したくなるような課題の設定及び提示が生徒の学びの深まりにつながると考えた。

身のまわりにある事象に対するズレを感じさせ、不思議を自らの探究の課題に設定することから探究への意欲に繋げ、探究の過程の中で「理科の見方・考え方」を働かせながら生徒が深い学びに向かう姿を目指すこととした。

そこで、本研究では、深い学びについて「生徒が、自己の学びを振り返りながら学びをつなぎ、科学的に探究することができる授業」として捉え、研究主題を設定した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

本単元では、反射板に迫る単元末の探究活動に向けて日常的に見かける「光」の性質について、観察、実験や作図を用いて学習する。太陽光が空気中、水中問わず直進する仕組みや鏡やガラス、水面に向けて入射する光が反射や屈折を起こす仕組みなど、日常生活と結び付けながら探究活動を行うように指導を進める。

この際に、上越地区の研究主題である「課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成」を達成するために、以下の３点について意識して指導計画を作成した。

①　学んだ知識を活用して課題や目標を設定する。
　知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする。（「深い学びの 20 の技法①、②」）
　日常生活における身近な現象を提示したり、既習内容を想起させたりし、生徒が十分に話し合う場を設定する。

②　学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする。
　仲間と練り合いや練り上げをする。（「深い学びの 20 の技法⑨、⑩」）
　日常生活における身近な現象について様々な方法で探究し、議論する。既習の知識や技能を活用する場を設定する。

③　理由や根拠を示して論理的に説明する。（「深い学びの 20 の技法⑬」）
　実験結果や仲間の意見を根拠として、身のまわりの自然現象を論理的に説明する。

単元計画（探究活動に関する）

計画	学習の実際	「深い学びの 20 の技法」
①計画	○反射板と鏡面反射との違いから既習の知識とのズレを感じ、その仕組みに迫る探究活動を学習課題に設定する。 ○反射板の仕組みについて、予想をもとに、班でどのような道具を使って検証していくか、自由に実験計画を立てる。	①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する ②知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする
②製作	○班で考えた実験計画をもとに、反射板を実際に製作する。	
③実験 考察	○予想をもとに、班で製作した反射板の有用性について探究したことを ICT の記録にまとめ、科学的に説明する。	⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする
④プレゼンテーション	○より効率の良い反射板の仕組みを、他のグループとの議論を重ねながら、学級全体で練り上げる。 ○予想をもとに、班で製作した反射板の有用性について考えたことを ICT の記録を活用しながら、学級全体で練り上げる。	⑩仲間と練り合いや練り上げをする ⑬理由や根拠を示して論理的に説明する

7　研究の成果と課題

・自然事象に気づく場の保障

夜間に反射板と平面鏡にそれぞれ様々な方向から光を照射する映像を視聴させた。平面鏡は真正面以外は黒く見え続ける、反射板はあらゆる角度からの光に対してもその方向に向けて眩しく光を反射する様子が見られる。生徒は反射板の反射において、既習の鏡面反射における反射の法則とのズレが生じていることに疑問をもち、口に出す姿が見られた。そして、疑問を解決するために反射板の構造を推測し、主体的に実験計画を立てる姿に繋がった。

・複線型の学び

生徒は４名程度の班で自らが自由な発想で考案した性能の良い反射板を具現化するための探究活動を行った。その際、自由に加工できる金属板、ミラーキューブ、ガラス球、アクリル棒などを自由自在に組み合わせて考案できるようにした。生徒は役割分担をしながらも各自が課題を自分事として捉え、試行錯誤する姿が見られた。また、他との競い合いをする活動を仕組むことで、他班のリサーチを主体的に行う姿に繋がり、協働的な学びが生まれる様子も見られた。

・Canva を用いた共有方法の工夫

生徒はホワイトボード機能で全体に共有したり、探究の過程において同時双方向で他班と常に確認し合ったりしながら、考察を進めた。また、他班の意見を聞くことで、自らの班の意見を見つめなおし、再実験などを通して考えをさらに深めた。そして、「より効率の良い反射板の仕組み」を、他のグループとの議論を重ねながら、学級全体で練り上げることができた。

・見方・考え方を働かせる手立ての工夫

作図や記録写真によって可視化された光の道筋とフラッシュ撮影した写真の眩しさなどの自己の主観的な見え方との関係付けを行ったり、メリット、デメリットを洗い出して他班との比較を行ったりする過程で、生徒は量的・関係的な視点を働かせて分析する姿が見られた。また、作戦会議と称した教師相手のプレゼンを行い、それぞれの班に個別支援を行った。単元末のパフォーマンス課題として探究の成果として、商品開発してきた新しい反射板を、公開授業の参観者を対象にプレゼン合戦を行う場を設定した。多くの生徒がフラッシュ撮影した写真と作図によって可視化された光の道筋を関連付けていたり、方向を限定し反射光の光量が大きくなる構造と光量は少なくなるが、広い角度から見えやすくなる構造との比較を行ったりして説明していた。見方・考え方を働かせながら、深い学びに向かう様子を確認することができた。

8　運営の成果と課題

・１年次は単元の終末において２枚の鏡を用いて反射板の仕組みを解決する活動を構想し、多くの実践を行い、成果を上げた。２年次は１年次の研究を基盤としながら、実践を積み重ね、「複線型の学び」を取り入れる授業を考案した。知識・技能を全て活用しながら思考を深める生徒を育成することができたと考える。

・推進委員の公開授業の回数に制限があった。運営費から旅費を捻出する、公開授業に参加する人数を絞る、動画での共有をするなどし、回数を増やすことで教師の学びをより深めることにつながったと考える。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　上越　　3　会場校　上越市立城東中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11　月　11　日（　火　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	上越教育事務所学校支援第２課・指導主事	植木　厚夫
(2) 研究推進責任者	上越市立城西中学校・教諭	中野　祐輔
(3) 会場校責任者	上越市立城東中学校・教諭	松本　義克
(4) 研究推進委員（授業者）	上越市立城東中学校・教諭	堀越　諒太
研究推進委員長	上越市立東頸中学校・校長	牧井　　創
研究推進委員	上越市立八千浦中学校・教諭	永井　　哲
	上越市立直江津中学校・教諭	和田　慧一
	上越市立春日中学校・教諭	覺張　　壮
	上越市立東頸中学校・教諭	下山　裕考

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	６月６日／城東中学校	9	・１年次の成果と課題、全県合同会議の伝達 ・２年次の研究方針検討及び研究計画の作成、協議
2	7月 22 日／直江津中学校	9	・情報誌「Class」原稿確認 ・研究会指導案の検討 ・プレ授業①　第１学年「光の性質」 直江津中学校　和田慧一　教諭
3	８月７日／城東中学校	8	・情報誌「Class」原稿確認 ・研究会指導案の検討 ・協議題等、協議会運営の検討 ・会場運営の検討
4	９月 30 日／春日中学校	9	・研究会全体要項、２次案内の確認 ・研究会指導案の検討 ・プレ授業②　第１学年「光の性質」 春日中学校　覺張　壮　教諭
5	10月 16 日／東頸中学校		・プレ授業③　学級閉鎖により中止 各推進委員で指導案の検討
6	10月 27 日／城東中学校	8	・研究会全体の運営最終確認 ・授業プレゼン、研究概要プレゼン検討 ・プレ授業④　第１学年「光の性質」 城東中学校　堀越諒太　教諭
7	11月 10 日／城東中学校	8	【教育研究発表会】前日準備 ・授業、協議会会場（体育館）作成 ・各種掲示物の設置 ・研究会当日運営の最終確認
8	11月 11 日／城東中学校	8	【教育研究発表会】当日 ・開会式 挨拶：市学校研理科部長 牧井　創 校長（城西中学校　保坂修校長） 授業説明：責任者 中野祐輔 教諭 ・公開授業　城東中学校 堀越諒太 教諭 第１学年「身のまわりの現象」 ・全体会 概要説明：責任者 中野祐輔 教諭 ・協議会 テーマ：課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成 指導：上越教育事務所 植木　厚夫 指導主事 ・閉会式 挨拶：会場校 長谷川　晋 校長
9	12 月５日／城東中学校	8	・協議 成果の概要報告書の作成

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　８４　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　３８　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　４０　）名	(4) 教育委員会・センター　（　２　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　４　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　０　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
１年３組	単元「身のまわりの現象」第１章「光の性質」 性能の良い反射板を作ろう。	堀越　諒太

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成	上越教育事務所 指導主事 植木　厚夫 様	上越市立直江津中学校 和田　慧一　教諭	上越市立城西中学校 中野　祐輔　教諭

令和　７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　髙橋　悠太
（学校名：南魚沼市立塩沢中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　理科

２　郡市名　南魚沼市・南魚沼郡　　３　会場校　南魚沼市立六日町中学校

４　研究主題

「生きて働く知識」を形成する授業づくり
～練り合いを通して知識を再構成する学びの実現～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

＜主題設定の理由＞

現代社会では知識を活用し問題解決に生かす力が求められており、学習指導要領でも「生きて働く知識及び技能」が重要とされている。しかし、実際の授業では、知識の暗記に留まってしまう場合も多い。具体的には、本研究で取り上げた３年単元「化学変化とイオン」において中和反応を学ぶ際、粒子レベルでの反応の本質にまで理解が及ばないことがある。そこで、本研究ではイオンモデルなどの「学習モデル」を活用して粒子の動きや反応の意味を視覚的に捉える授業を構想し、さらにペアやグループでの「練り合い」を通して知識を修正・再構成することで、状況に応じて活用できる「生きて働く知識」の形成を目指した。

＜目指す深い学びの姿＞

仮説を立てたり、実験結果を考察したりする場面で、既習事項を根拠として活用できている姿を、目指す深い学びの姿とした。特に、予想とは異なる結果が得られた際に、「どうにかして説明できないか」と自ら問いを立て、既習事項や経験と関連づけながら意味づけや概念の再構成を試みたり、主体的に問いをもち、仲間との対話や協働的な活動を通して学びを深め、既習事項を後の学習や実生活に生かして粘り強く思考を続けられたりする生徒を育成する。

６ 研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

本研究では、主題に迫るため、以下の 3 つの手立てを単元を通して取り入れた。

【手立て 1】仲間と練り合いや練り上げをする（「深い学びの技法」の No.10）

中和反応をイオンモデルを用いて 4 コマで表現する活動を設定し、表現の違いを比較検討させることで、「より事実に即しているか」といった視点で自分の考えをより妥当なものへと練り上げる対話活動を重視した。

【手立て 2】学習モデルを活用して思考や表現をする（「深い学びの技法」の No.14）

単元を通して、手で操作できる立体的なイオンモデルを継続して活用した。これにより、目に見えない粒子の実体的な存在感を掴ませ、思考や表現の具体化・深まりを目指した。

【手立て 3】身につけた資質・能力をメタ認知し成長につなげる（「深い学びの技法」の No.18）

学習のまとまりごとに振り返りシート「学びのあしあと」を活用し、生徒に記述させた。これにより、自分の学びを自覚し、身に付けた知識や技能を整理することで、学習内容の定着とメタ認知の育

成を図った。

また、本研究では生きて働く知識を形成するための「授業づくり」として、単元を通して３つの視点を取り入れた。特に、単元構成の工夫として、中和実験を教科書の構成と順番を入れ替え、生成する塩を確かめる実験を後で行うこととした。このことにより、生徒の中に課題追究の必要性を生むことができた。また、BTB 溶液の色はその変化だけでなく濃さの違いにも注目させることでより深い理解につなげたり、水溶液の性質を調べる際には、身の回りにある物質を用いたりすることで日常生活との関連を図ったりした。これらの視点を持ちながら授業づくりに取り組み、「なぜ学ぶのか」「各事象がどのようにして関連しているのか」等を実感させ、「生きて働く知識」を形成する一助となった。

７　研究の成果と課題

＜成果＞

本研究授業においては、研究主題の実現に向けた授業づくりが、日常の指導の積み重ねに支えられた形で明確に表れていた。参観者の事後アンケートには、生徒が自分の考えを根拠をもって表現し、ペア・グループでの練り合いを通してより妥当な考えへと更新していく過程が見られたという評価が多く寄せられた。また、練り合いのための教材の工夫が適切であり、既習事項の位置付けや課題提示がわかりやすかった点も高く評価されている。さらに、単元全体の見通しを明確に持たせる導入、活動の見通しをつくるための発問の工夫、スムーズに各自の思考を深めさせるための準備が丁寧にされていたとの意見も多く、生徒が主体的に学習に向かう姿が日常的に育まれていることが確認された。研究主題の方向性が適切であり、授業実践として一定の成果が得られたと考える。

＜課題＞

生徒が学びを自ら言語化し、意見を統合する場面がやや不足していたという意見が複数見られた。また、生徒個々の積極性に差があり、話し合いや考察の場面での発言や対話量に差があったという指摘もあった。発問や活動の流れそのものは適切であったが、思考を深めるための時間配分、板書内容の精選、振り返りの扱いなどについて、改善の余地がある。さらに、技法に偏りすぎず、生徒のつまずきや気付きから授業を再構成する柔軟性を今後の研究で一層重視する必要がある。

８　運営の成果と課題

＜成果＞

要項や指導案を事前に送付するなど、参観者からは事前準備について高い評価があった。研究発表会に向けた準備の周到さが伝わり、当日の進行も円滑で、参観に支障が出ることはほとんどなかった。協議会についても、観点が明確であり、参観者にとっても学びの多い場となったとの意見が寄せられている。また、練り合い場面を参観しやすいように会場を理科室ではなく広い教室に変更したり、生徒の学びの様子を視覚的に捉えられるようモニターを用意したりするなど、全体として参観者に配慮された会場であったことも成果として挙げられる。

＜課題＞

参観者の授業会場までの動線をより分かりやすく整理すること、資料の共有を迅速化することなど、円滑な運営に向けた細部の工夫が求められる。また、参観者数が多くなる場合に備えた教室レイアウトや、協議会における発言機会の確保など、研究会全体の質を高めるための仕組みづくりも今後検討すべき課題として挙げられる。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　南魚沼市・南魚沼郡　　3　会場校　南魚沼市立六日町中学校

4　研究会開催期日　令和　7 年　11 月　20 日（木）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	中越教育事務　学校支援第２課・課長	上村　貴雄
(2) 研究推進責任者	南魚沼市立塩沢中学校・教諭	髙橋　悠太
(3) 会場校責任者	南魚沼市立六日町中学校・教諭	佐々木　健吾
(4) 研究推進委員（授業者	南魚沼市立六日町中学校・教諭（授業者）	岡崎　一洸
	南魚沼市学習指導センター・指導主事	宇佐美　宏保
	湯沢町立湯沢中学校・教頭	加藤　賢
	湯沢町立湯沢中学校・教諭	小田川　琢郎
	南魚沼市立大和中学校・教諭	山田　幸平
	南魚沼市立八海中学校・教諭	青木　一樹

6 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 25 日/六日町中	8	研究推進委員顔合わせ、研究の方向性の確認
2	8 月 1 日/六日町中	17	指導案検討会
3	10 月 3 日/大和中	16	第 1 回公開授業・協議会 兼　郡市教振公開授業 （授業者　大和中　山田　幸平　教諭） 「酸・アルカリとイオン　中和」
4	10 月 16 日/八海中	7	第 2 回公開授業・協議会（授業者　八海中　青木　一樹　教諭） 「酸・アルカリとイオン　中和」
5	11 月 5 日/湯沢中	7	第 3 回公開授業・協議会（授業者　湯沢中　小田川　琢郎　教諭） 「酸・アルカリとイオン　中和」
6	11 月 19 日/六日町中	7	研究会前日準備
7	11 月 20 日/六日町中	54	研究会・協議会（授業者　六日町中　岡崎　一洸　教諭） 「酸・アルカリとイオン　中和」

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　54　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　17　）名	(4) 教育委員会・センター　（　3　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　34　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3 年1 組	酸・アルカリとイオン 中和	六日町中学校　　岡崎　一洸　教諭

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者
第1 分科会	研究主題に迫るための 3 つの手立ては有効であったか。	中越教育事務所学校支援第２課課長 上村　貴雄 様	南魚沼市立塩沢中学校 髙橋　悠太教諭

令和　７　年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　　間　英法
（学校名：　新潟市立宮浦中学校　　）

このことについて，下記のとおり報告します。

１　部会名　　理科

２　郡市名　　新潟市　　３　会場校　　新潟市立下山中学校

４　研究主題

探究学習による深い学びの促進

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領の中学理科の目標は「自然の事物・現象に関わり，理科の見方・考え方を働かせ，見通しをもって観察，実験を行うことなどを通して，自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と記されている。そして，目指す資質・能力を育成する学びの学習過程には課題の把握（発見），課題の探究（追究），課題の解決という過程が示されている。

また，新潟県中学校教育研究会では，研究主題「深い学びにいたる授業～「深い学びの技法」を基に構成する学習過程に着目して～」を設定している。その中で，「深い学びにいたる授業」を運営の重点に置き，生徒が「深い学び」にいたる過程において，教師が生徒の学びを最大限に引き出し，生徒の学びを支援する姿を求めている。

さらに，新潟市が目指す授業づくりとして，「単元デザイン」，「学習課題とまとめ，振り返り」，「アウトプットのある授業の推進」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の推進」「授業と生徒指導の一体的な充実の推進」を行うこととしている。

よって，日々の授業において，主体的・対話的で深い学びの視点での授業改革を意識し，各校の生徒の実態に応じた探究の過程を積み重ねることで，新潟市中学校生徒全体の「深い学び」が促進されると考える

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

単元デザインで生徒の思考の流れ，内容や時間のまとまりを意識した授業づくりが必要であり，その上で，探究の過程を踏まえた授業展開を行う。

ともするとこれまでの授業研究は観察・実験を終えての考察・推論に重点を置いていた。

しかし，深い学びが成立するには，探究の過程における「課題の把握」で課題を生徒自身のものにすることと「課題の探究」で自分なりの仮説を立てられることが大切と考えた。

① 課題の把握（発見）	「深い学びの技法」No. ３：視点を設定して思考する。
② 課題の探究（追究）	「深い学びの技法」No. 15：根拠を示して理論的に説明する。
③ 課題の解決	「深い学びの技法」No. 18：メタ認知して成長につなげる。

今回の研究は中学２年「電流とその利用」における「電流・電圧と抵抗」を扱っている。単元デザインとして電流の流れをモデルで考え，抵抗によって電流の大きさを制御する現象を説明できるような生徒の育成を目指した。

7　研究の成果と課題

公開授業の参観者アンケートから次の結果を得た。

「今回の学習活動は，探究学習による深い学びがされていたか」

・有効であった　75.0%　・おおむね有効であった　21.0%

「抵抗について，単元を通して一貫して，球が転がるモデルで考えさせていたことで，目に見えない電流について，根拠と自信を持って予想したり，友達に発表したり，まとめることができていて，深い学びにつながっていることがよくわかりました」

「抵抗のモデルが大変工夫されていて素晴らしかったです。身近で比較的安価に手に入るもので作成されていて、授業に取り入れやすいと思いました。たくさんの参観者がいる中で、生徒たちが考えを発表できているのは、普段の授業から考えを立てるスキルを培ってきているからこそだと感じました。私も「はとじかん」を授業で取り入れてみようと思います」

「木の棒を刺して作る抵抗モデルは過去にありましたが、マグネットを使って簡単に抵抗モデルを作り上げるところに提案性のあるモデルを提示していただきました。大変興味深く思いました。また、ICT を有効に使い、生徒の意見を吸い上げたり、全員参加を達成しているところにすばらしさを感じました。タブレットはこうやって使う!という好事例を得た今回の研修会は、私にとって得難い経験となりました。授業準備を含め、多数の参観者のいる中で授業を行われた武藤先生には感謝申し上げます。ありがとうございました」

「ロイロノートのアンケート機能での全員参加型，発言スタイルでなく一人一人が友人に発表する相互発表スタイル，理由を考えるためのモデルを使っての実験，すべてが深い学びと探究につながったと感じました」

・どちらかというと有効ではなかった　4.0%　　・有効ではなかった　0.0%

「モデルを通して，ある粒子概念を獲得することはできていたと思われる。しかし，モデルへの理解（電流の大きさとは?）などが曖昧であった。そのため，「他者へ表現すること」が曖昧になり，その先にある『協働的な学び』を効果的に深めるには至らなかったと感じた。単元の中で，生徒と教師がやりとりをしながら，モデルへの理解を深める必要がある。また，学習課題も教師から提示されたものであったので，生徒の主体的な学びを実現するためには，回路を予想させた後，実際に実験させ，驚かせる。そこから課題設定をして，『言葉にならない頭の中を整理する』ために，生徒がこれまで活用してきたモデルを使って『シミュレーションしてみたい』という授業構成の方が良いのではないかと感じた」

今回の研究は深い学びを促進するための探究の過程の「課題の把握（発見）」に重点を置き，現象の説明と理解を深めるためにモデルを利用したことにある。成果として，上記のアンケート結果から，研究主題への取組は概ね達成できたといえる。

課題として，生徒が授業のねらいに則った活動を行えた（授業のねらいは何）か，１つの抵抗と並列回路モデルの違いが分かりにくかった等の指摘もあった。より多くの生徒が主体的に取り組み，学んだ知識を基にして対話的な活動を行い，学習課題により深い視点で，電流概念を量的・関係的な見方・考え方で捉えられるような単元デザインや継続した授業づくりが必要である。

8　運営の成果と課題

・１年次の研究を生かし，本年度の研究につなげることができた。２年間の継続研究は有効であった。
・検討会の際は教材，単元，教具について遺憾なく意見交換を深めることができた。
・研究推進委員に加え，新潟市中教研理科部の幹事・部員の協力で研究を深めることができた。
・多くの参観者を迎えるための駐車場の確保。
・次年度の研究へ授業録画が良いが，管理を行い，必要が無くなった段階で削除が必要。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　新潟市立下山中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11月　6日（　木　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	川上　辰朗
(2) 研究推進責任者	宮浦中学校・教諭	間　英法
(3) 会場校責任者（授業者）	下山中学校・教諭	武藤　啓将
(4) 研究推進委員	亀田西中学校・校長	北　竜征
	東新潟中学校・教諭	渡邉 ひとみ
	山の下中学校・教諭	宇内 美桜里
	藤見中学校・教諭	小松 健治
	石山中学校・教諭	堀川　高弘

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月29日／下山中	8	一年次研究の成果及び今年度の研究の方向性の確認 指導案検討
2	8月21日／下山中	8	指導案検討
3	9月18日／下山中	6	指導案検討
4	10月23日／下山中	5	研究会の仕事分担の確認 指導案最終検討
5	11月6日／下山中	8	公開授業当日
6	12月24日／下山中	8	年度反省

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　44　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　1　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　40　）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　2　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年2組	電流・電圧と抵抗	武藤啓将			

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　佐藤　隆洋
（学校名：　村上東中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　理科

２　郡市名　村上市岩船郡　　３　会場校　村上市立山北中学校

４　研究主題

理科における深い学びにいたる授業　～表現活動を通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習活動の中で事象を説明する場面を設定し、その中で表現活動（アウトプット）を行わせる。事象を説明するためには既習事項を理解している必要がある。より良い説明を考える活動の中で、既習事項を活用しながら思考する場面を意図的に設定し、生徒同士が協働的に学び合えるようにする。自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いて自分の考えを修正したりすることで、生徒がより深い学びに至る授業を目指す。また、ICT 等を活用しながら、協働的に表現活動を行うことによって、生徒たちのよさや可能性を引き出したい。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

（以下、活用する深い学びの技法５つ）

〈思考⑧〉異なる多様な考えを比較して考える
〈解決⑨〉学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする
〈解決⑩〉仲間と練りあいや練り上げをする
〈表現⑭〉学習モデルを活用して思考や表現をする
〈評価⑱〉身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる

学習活動における事象を説明する場面において、４人班で４コマ漫画を用いた協働的な表現活動を行う。４コマ漫画は１人が１コマを担当し、前後のコマを担当する生徒と連携を取りながら作成を行う。４コマ漫画はタブレットのスライドで作成することも紙やホワイトボード等を使って作成することも可能であるが、状況によって最適な方法をとるのがよいと考えられる。

２年次の公開授業では、塩化銅の電気分解で起こる事象の仕組みについて、４コマで表現する活動を行った。４コマのそれぞれで生徒に説明してほしい内容を「①塩化銅を水にとかしたとき」、「②電源（装置）のスイッチをいれたとき」、「③電流が流れたとき」、「④銅と塩素が発生したとき」と設定した。コマの説明内容を生徒に考えさせてもよいが、指定することで、生徒が考えやすくなったり、活動を進めやすくなったりしたと考えられる。また、公開授業では、タブレットのロイロノートを４コマの作成で使用した。ロイロノートを使ったことで、生徒は席を立つことなく、他の生徒のコマの作成の様子を見ることができた。このような協働的な表現活動を行うことで、事象の仕組みを頭の中で理解している生徒もアウトプットで情報が整理され、１人では表現ができない生徒も周りの生徒の力を借りて、課題を解決することができたと考えられる。

７　研究の成果と課題

以下のような成果が挙げられる。

〈授業後の生徒の振り返りから〉

・多くの生徒が塩化銅の電気分解についてだけでなく、陽イオンが電子を受け取り、陰イオンが電子を放出し、それぞれ物質になるという電気分解の本質に関しての説明ができている。

・グループのメンバーと一緒に考えたり、教え合ったりしながらコマの作成を進めたことが自分の理解をより深め、効果的だったという意見が多かった。４コマの表現活動に関して、肯定的な意見がほとんどだった。

〈授業者の見取りから〉

・生徒がイオンに関する問題を考える際に、イオンや電子のモデルを書きながら考える様子が見られるようになった。

・暗記した知識としてではなく、本質的な理解をしている様子が見られる。

・４コマの活動は生徒の印象に残りやすい。

・イオンや電子の動きを考えられるようになったことで、電気分解だけでなく、電池の仕組みを考える際にも理解がスムーズであった。

以下のような課題が挙げられる。

〈４コマの表現活動について〉

・生徒が活動に慣れ、効果的な活用ができるまで時間がかかる。様々な場面で協働での表現活動を繰り返す必要がある。

・各コマの説明内容を指定するべきか、どこまで生徒に教えるべきなどを決める、モデルの準備をするなど教師側の入念な準備、検討が必要である。

８　運営の成果と課題

以下のような成果が挙げられる。

・新潟県最北の学校での開催であったが、佐渡や県外からも参加者があり、多様な視点で協議ができた。

・協議会での話し合いが活発に行われ、様々な意見が交わされていた。授業者への質問も多かった。

・来賓、評議員から、授業での生徒の様子や、授業の手立てなどに関して多くのお褒めの言葉をいただいた。他の参加者からは自分もぜひ４コマの活動をやってみたい、自分の地区の研究の参考にしたいといった言葉もいただいた。

・会場校の責任者（教頭）と電話連絡を密に行い、理科部員で担う仕事と会場校の職員にお願いする仕事を明確にしながら、準備を進めたことで大きなトラブルなく、研究発表会を実施することができた。

以下のような課題が挙げられる。

・協議会の時間が十分でなく、時間がない中で急いで協議をしてもらうことになってしまった。

・会場校の職員に会場準備や資料の印刷、駐車場の案内などを多くの業務を担ってもらったが、もう少し理科部員で担える部分がなかったか検討する必要がある。

・理科部員に研究推進委員会で進めている研究内容や４コマの表現活動の利点などをもっと早い段階で周知し、各校で実践してもらい、意見を集約できるとよかった。

資　料

1　部会名　理科

2　郡市名　村上市岩船郡　　3　会場校　村上市立山北中学校

4　研究会開催期日　令和７年１０月１０日（金）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	下越教育事務所・指導主事	鈴木　淳
(2) 研究推進責任者	村上東中学校・教諭	佐藤　隆洋
(3) 会場校責任者	山北中学校・教頭	夏井　徳治
(4) 研究推進委員(授業者)	神林中学校・校長	横山　雅史
	神林中学校・教諭	渡邊　響
	朝日中学校・教諭	富樫　英夫
	岩船中学校・教諭（プレ授業者）	遠山　俊一郎
	山北中学校・教諭（公開授業者）	須貝　将士

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/28/神林中学校	6	指導案検討、運営の進め方について
2	6/23/神林中学校	6	指導案検討、運営の進め方について
3	7/31/神林中学校	6	指導案検討、運営の進め方について
4	8/21/理科教育センター	6	授業のポイントの研修、各校での実践内容の共有、指導案検討など
5	9/10/岩船中学校	7	岩船中学校の遠山教諭によるプレ授業及び検討会
6	9/24/神林中学校	6	指導案検討、運営の進め方について
7	10/10/山北中学校	8	山北中学校の須貝教諭による公開授業及び検討会
8	12/10/神林中学校	5	今年度の活動のまとめ

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　46　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　2　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　39　）名	(4) 教育委員会・センター　（　0　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　5　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3年A組	化学変化とイオン	須貝将士			

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第１分科会	４コマ漫画を作成する協働的表現活動を通して、生徒が深い学びに至っている姿があったか。	下越事務所 指導主事 鈴木　淳　様	村上市立神林中学校 渡邊　響　教諭	村上市立村上東中学校 佐藤　隆洋　教諭

令和６，７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　森　瑶子
（学校名：　糸魚川市立糸魚川東中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　英語

２　郡市名　糸魚川　　３　会場校　糸魚川市立能生中学校

４　研究主題

理由や根拠をもち、自分の考えを表現できる生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

市内の英語科の授業では、生徒が「英語を話す」場面が多く見られる。しかし、一つのテーマに対して話題が深まるというよりはただ広がっていく発話が見られ、「深い学び」とはいえない現状であった。また、聞いたことや読んだことについて自分の考えを述べる等、思考を伴う活動になると生徒の意欲が低下する傾向にあり、日本語のレベルでも考えをもてない生徒が多かった。そこで、「一つの話題に対して、自分の考えを表現できる」ことに加え、どうしてそう思うのか、事象に対しての意見と理由が言えたり、根拠を示したうえでの意見が言えたりできる生徒の姿を目指したい、との思いをこめてこの研究主題とした。なお、理由や根拠というと難しそうに聞こえるが、自分の経験やエピソード、本文の引用等も含める。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

①　コミュニケーションを行う目的・場面・状況等の明確な課題設定　（深い学びの技法 No,3）

「深い学びにいたる授業」の実践のためにコミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定する。特に、単元末のゴールを教師と生徒が共有し、課題達成のために何をすべきか生徒に考えさせる。教師は単元指導計画をバックワードで設計し、ゴールに迫るための活動をスモールステップで設定していく。

②　思考を深める・練り上げるための協働学習（協同学習）　（深い学びの技法 No,8,9,10）

他者との対話を通して、思考を深めていくことができるようにする。具体的には、small talk でのやり取りにおいて話し手の思考が「広がる」よりは「深まる」よう、聞き手がオープンクエスチョンを使ってトレーニングを積み重ねる。そして、理由付けやエピソードトークを発話できることが一つの「思考の深まり」と捉える。また、言語活動を行ってから中間指導の時間を設け、他者との交流の中で生徒が自分の考えを練り上げられるようにする。さらに、生徒同士での発話の確認をしたり、言いたかったけれど言えなかった表現のパラフレーズを全体で考えたりするなど、思考を深められるような工夫をする。

③　思考を深めるための工夫（教具）　（深い学びの技法 No,15,16）

思考の過程を視覚化することで、生徒が論理的に考えを表現できるようになると考える。特に、課題や学習内容に合わせた教具の使用を工夫する。例えば、活動を行う際に、思考ツールを使用し、思考を整理する。また、生徒同士の発話をメモしたり、言えない表現をまとめたりするためにホワイトボードを用いる。さらに、全体での考えを共有するために、ロイロノートを用いる。

７　研究の成果と課題

＜成果＞

・生徒は、協働学習を通して学びを深めていくことができた。具体的には、ペアトーク時のオープンクエスチョンの使用や、言語活動の中間指導時における学び合いにおける有効性が感じられた。研究発表会では生徒が課題に向かって仲間とともに励む姿が見られ、「small talk（ペアトーク）の毎日の積み重ねが大切だ」「中間指導のあり方について考えさせられた」と評価する声が参観者から聞かれた。

・コミュニケーションを行う目的・場面・状況等の明確な設定について、研究推進委員会においてより具体的な方策を話し合うことができた。特に、生徒がチャレンジしてみたいというものであるだけでなく、誰に対して何のために活動を行うのかが明確な課題である方が、生徒は教師が多く説明せずともどんな内容・言葉を伝えたらよいか深く考えることができた。

・市内英語科授業の授業改善につながった。研究１年次では、生徒が失敗しないようにと足場架けを多く行う等、従来型の授業が多く見られた。しかし、授業公開や協議会における指導者からの助言を取り入れていく中で、様々な方策を教師が学び、生徒が Try and error を繰り返す授業のあり方を一人一人の教師がそれぞれ目指すようになった。

・研究推進委員会は１，２年次とも委員などの授業公開がメインとなる形だった。ただの話合いではないので委員が研究をより自分事として捉えることができた。

・協議会では、それぞれが公開授業をしていたためか、批判をし合うようなものではなく、より良いものを求めて語り合う場となり、一人一人の教師の学びとなった。ファシリテーターの練習場面にもなり、特に若手の教師には有意義な場となった。

・市内英語科の「一人（一校）一公開授業」はもともとあった流れであるが、互いの授業改善のための有意義な場であることが本研究で再確認することができた。

＜課題＞

・研究主題に迫る手立てを３つ立てはしたものの、具体的とは言えなかった。そのため、研究推進委員の研究授業も「共通実践」のようなものがあまり感じられず、研究発表会の授業に向けたつながりのあるものとは言い難かった。共同での研究の軸を立てるために、最初の研究推進委員会で指導者から講話や模擬授業をしていただく等して目指すものが明確になった状態で始められると良かった。

・市内各校研究推進委員はいたが、委員から同じ学校の職員への波及が弱かった。授業参観や協議会への参加は積極的にしてもらったが、それだけで終わってしまったため、委員以外の職員へ研究を発信する資料や教具などの具体物があるとよかった。

８　運営の成果と課題

・研究発表会当日は、会場校が中心となり準備を進めることができた。当日はトラブルもなく、円滑に発表会を行うことができた。

・研究推進委員会での協議会で、発表会当日をイメージしたファシリテーションを行ったことにより、若手のスキルアップとなった。

・研究推進委員会は１，２年次とも委員などの授業公開がメインだったため、指導案や手立ての練り上げ、研究会当日の運営などを話す場をあまりもつことができなかった。そのため、発表会当日の運営において、うまく役割を分担することができなかった。

・発表会当日のタイムスケジュールや会場の全体像などを、会場校責任者ともう少し早めに打ち合わせておけばよかった。

資　料

1　部会名　英語

2　郡市名　糸魚川　　3　会場校　糸魚川市立能生中学校

4　研究会開催期日　令和　　7年　11月　11日（　火　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	大場　浩正
(1) 指導者	上越教育事務所・指導主事	久保　成毅
(2) 研究推進責任者	糸魚川市立糸魚川東中学校・教諭	森　瑶子
(3) 会場校責任者	糸魚川市立能生中学校・教頭	熊木　勝
(4) 研究推進委員（授業者）	糸魚川市立能生中学校・教諭	石野　佑紀枝
	糸魚川市立青海中学校・校長	平野　克之
	糸魚川市立青海中学校・教諭	田中　健昭
	糸魚川市立糸魚川中学校・教諭	川嶋　真喜

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/18　／　能生中	8	石野教諭公開授業（３年　PROGRAM 2)、協議会（協働学習のあり方、small talk の位置づけ等）
2	7/10　／　糸魚川東中	9	森教諭公開授業（２年　Our Project 4)、協議会（目的・場面・状況設定の明確な課題を立てるには、オープンクエスチョンの使い方等）
3	8/1　／　糸魚川東中	7	研究の方向性の確認、class の原稿確認、研究会当日の確認
4	9/17　／　青海中	8	田中教諭公開授業（２年　PROGRAM 4)、協議会（ICT や生成 AI の活用、バックワードデザインでの単元構想等）
5	10/16　／　糸魚川中	8	川嶋教諭公開授業（１年　PROGRAM 5)、協議会（目的・場面・状況設定の明確な課題、「話すこと」から「書くこと」につなげる手立て等）指導案検討
6	12/1　／　能生中	6	来年度以降の指定研究と今後の市内の研究に向けた研究の成果と課題の検討

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　６３　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　１０　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　１３　）名	(4) 教育委員会・センター　（　０　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　４０　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　０　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年１組	Program 6　The Great Pacific Garbage Patch	石野　佑紀枝　教諭

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者
研究主題「理由や根拠をもち、自分の考えを表現できる生徒」の育成のために、本時の手立て（手立て②協働学習【オープンクエスチョン、中間指導】、手立て③思考を深める工夫【ロイロノート】）は有効であったか。	上越教育大学　教授 大場　浩正　様 上越教育事務所　指導主事 久保　成毅　様	糸魚川市立青海中学校 田中　健昭　教諭

令和　７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　渡邉　未緒
（学校名：加茂市立須田中学校）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　英語

２　郡市名　加茂市南蒲原郡　　３　会場校　田上町立田上中学校

４　研究主題

目的・場面・状況に応じて、伝えたい内容を適切な表現を用いて伝えようとする生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

初年度、加茂市・田上町の英語の先生方で生徒の現状と課題について話し合った。どの学校においても、生徒は概ね意欲的に学習に取り組んでいる様子があった。しかし、特に「書く」「話す」の言語活動では、練習を通して身に付いていてほしい表現がなかなか正しくアウトプットすることができないという課題が多くの学校で見られた。そのため、授業内で学習した表現を言語活動で正しく表現できることを目指し、本主題を設定した。目的・場面・状況に応じてより正確に表現できる生徒を「目指す生徒の姿」とした。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

単元を導入する際、生徒が見通しをもって学習に取り組めるよう、学習モデルを提示する。学習モデルに近づけるよう、仲間の表現を自分の表現に生かしたり、個の学習を互いに協力してより伝わりやすい表現に練り上げたりする場を設ける。また、スモールトークを深い学びの技法として授業にとり入れ、スモールトークを行う際に、まずは教員がモデルを示し、生徒に話す内容をイメージさせる。その後、生徒と教員のやりとりでさらにイメージを膨らませ、自信をもって話せるよう仕向ける。そして生徒が伝えたいことをキャッチし、中間指導で共通理解を図ったり、気になる文法事項を確認したりし、より良いやりとりになるよう指導する。

今年度は、中越教育事務所主催の授業改善委員会と兼ねて研究を進めることとなった。毎授業で各授業者は研究主題を意識して授業を公開し、参加者は授業参観後研究主題を基にした協議を毎回重ねた。協議会を通し、深い学びの技法の有効性や学習過程のあり方について考え、目指す姿を実現しようと研究した。

７　研究の成果と課題

ポイント１「話すこと（やりとり）から始まる授業を展開していく」

共通で使っている教科書が今年度改訂され、スモールトークを自然に無理なくとり入れられる作りになっていることもあり、スモールトークはどの学校でも実践できた。まだまだ英語を話すことに抵抗があり、質問してそれに答えることを繰り返し、内容にふくらみがないペアも多いが、会話を助ける表現集（ヘルプカード）や教師による中間指導によって、自然な流れの会話になったり、間違いやすそうな英文を気をつけるようになったりして、生徒の話す英語がレベルアップしていく様子が見られた。

「話すこと（やり取り）から始まる授業を展開」するにあたって、特に以下の三点を重視した。

① トークテーマの設定

トークテーマを工夫することで、「教科書に出てこない表現」「単元の言語知識獲得」「文法事項の復習」などを使える場にできる。ただし、ゴールに迫りすぎる内容であると、気軽な日常会話やフリートークにならず、授業の導入としては、不適切であるという意見もあり、さじ加減が必要である。そして、話すためには知識が必要であるので、ドリル練習も欠かせないとの意見もあった。

② 「話す」から「書く」の活動に繋げる

外国語の習得過程から考えると、話す活動で高められた技能を書く活動に生かすのは自然な流れである。そこで、スモールトークでワードバンクを増やしていき、生徒が書く活動により取り組みやすくなるようにした。実際に、生徒からも「話して使った表現を作文に入れることができた」と声があった。

③ 中間指導

これまでも、ペアやグループでの英語によるやり取りをさせてきたが、生徒の発話の様子を的確にキャッチして指導する必要があることから、１回のやり取りを終えた後に、教師が中間指導を行って、生徒が次のやり取りでより適切な表現を用いることができるようにすることを特に重視した。間違いやすそうな表現を共通理解したり、話している様子を見て表現に困ったことを引き出して全体で考えたり、また、誤った発音があれば全体でリピート練習したりして、生徒の様子に応じて、その時に必要な指導を行うようにした。

ポイント２「仲間との練り合い、練り上げをする学習課題を設定する」

本研究を通して、練り合いや練り上げをさせる上で、「どういう視点で話し合わせるかが重要である」と共通理解できた。当初はただどうやって表現すれば良いか分からない点をお互い教え合うだけに留まっていたが、「内容面」「言語面」を考えてアドバイスするという視点を提示することで、活発なグループでの話し合いが見られるようになってきた。内容面の例としては「同じくらいの年齢の相手」「○○が好きだから○○をすすめる」「具体的な例」「自分の経験に基づいた事実」、また、言語面の例としては「正しい英文で伝える」「つなぎ言葉」「自分が理解している英文で伝える」という話し合いの視点を生徒に示した。また、「内容面」「言語面」の両方において、生徒に「相手意識」をもつよう意識させた。

課題として、練り上げをする際はどうしても日本語を使うことが多くなり、英語の使用場面が減る点が挙げられる。また、仲間との練り合いの後には自己調整する時間の確保が必要であったり、複数回話し合わせることが有効であったりするため、時間がかかってしまう。それゆえ、いかにテンポ良く進めるかが重要になる。さらに、ペアやグループの学習形態も重要である。スローラーナーに教えるだけになってしまったり、違った意見をもった者同士、同じ意見をもつ者同士などのバランスを考えたりする必要がある。生徒同士の練り上げだけで正確な英文にすることは難しいので、活動の終末場面では、教師の指導も不可欠である。

ポイント３「単元ゴールを示すモデル文の提示と振り返りを実施する」

改訂前の教科書では単元のゴールとなるモデル文が示されていた。例えば、２年生の My dream の単元では Hana の農家になる夢が紹介されていた。しかし、今年度の教科書ではスピーチ「My Dream」ではリスニングでテキストがあるものの、教科書に文字で示されてはいない。丁度２年生の My Dream の授業を公開した授業者がいたこともあり、推進委員がそれぞれどう扱ったか話し合うことができた。モデル文として「テキストを文字で示さなかった」「文字にして生徒に配布した」と方法はさまざまあった。示すタイミングもさまざまで、単元が始める時にゴールとして示したり、英文を「書く」「話す（発表）」準備をする際に示したり、単元の特徴や生徒の実態を考えてタイミングを合わせていくという話になった。その中でも生徒がモデル文を作る実践があり、個の学びを全体の学びに繋げることができ、画期的な提案がなされた。モデル文は、特に、スローラーナーにとって学びの助けになり、見通しをもって学習するためにも大切なものである。ただ、モデル文を写すだけにならないよう気を配る必要がある。

振り返りに関しては、個で振り返ったものを次時に全体にフィードバックできたり、生徒の達成感や困り感を知ることができたりし、有効であることが確認できた。

８　運営の成果と課題

振り返ってみると、１年次の中頃までは授業公開を行うことになっている１校と研究推進責任者の所属校の教員のみが、ポイント１、２、３にあるような手立てを講じて研究を行っている状況であり、研究が推進されているとは言い難かった。指導者から、郡市の所属校の英語科教員全員が研究を行う必要性について指導があり、１年次後半からは歩を一にして共同研究が行ってくることができた。

今年度は中越教育事務所の授業改善委員会と兼ねたこともあり、授業公開と協議会の回数を多くもつことができた。その結果、郡市内の学校すべてが当研究を自分事ととらえ、毎回の協議会では、推進委員が意欲的に意見交換を行い、研究を大きく推進することができた。

資　料

1　部会名　英語

2　郡市名　加茂南蒲　　3　会場校　田上町立田上中学校

4　研究会開催期日　令和　7年　11月　26日（水）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟大学附属長岡中学校・教頭	川田　昌宏
(2) 研究推進責任者	加茂市立須田中学校・教諭	渡邉　未緒
(3) 会場校責任者	田上町立田上中学校・教頭	今井　奈奈
(4) 県･郡市指導主事	加茂市立教育委員会・指導主事	廣野　達也
(5) 研究推進委員(授業者)	田上町立田上中学校・教諭	伊藤　エリカ
	田上町立田上中学校・教諭	石山　亨
	田上町立田上中学校・教諭	貝津　光恵
	加茂市立加茂中学校・教諭	飯野　奈由美
	加茂市立葵中学校　・教諭	竹石　真由子
	加茂市立七谷中学校・教諭	吉武　裕子
	加茂市立若宮中学校・教諭	南雲　初
	加茂市立須田中学校・教頭	渡邊　邦博

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5月22日／加茂市役所	8人	今年度の確認
2	6月26日／加茂市役所	11人	昨年度の取り組みの振り返り
3	7月17日／七谷中学校	8人	公開授業参観（吉武先生、2年生 Project 1)、協議会
4	8月21日／須田中学校	20人	研究授業案検討
5	9月4日／葵中学校	14人	公開授業参観（竹石先生、3年生 Lesson 4)、協議会
6	10月2日／田上中学校	42人	公開授業参観（石山先生、1年生 Lesson 4)、協議会
7	10月15日／須田中学校	14人	公開授業参観（渡邉先生、3年生 Lesson 5)、協議会
8	11月26日／田上中学校	65人	研究授業（伊藤先生、3年生 Lesson 5)

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（65）名	(3) 小学校・高等学校教員　（2）名
(1) 郡市内中学校会員　（30）名	(4) 教育委員会・センター　（2）名
(2) 他郡市中学校会員　（31）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（0）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年１組	Lesson 5 Translating culture	伊藤　エリカ

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第１分科会	○small talk におけるペアトークは、テーマに対する思考を促し内容を深めるために有効だったか。 ○small talk における教師の中間指導は、言語面の正確性を高めるために有効だったか。	新潟大学附属長岡中学校 教頭　　川田　昌宏 様	田上町立田上中学校 石山　享　教諭	当校教諭 伊藤　エリカ

様式⑥ 指定研究 成果の概要報告書

令和７年度　県中教研指定研究　経過の概要報告書（２年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　風間　皓介
（学校名：　新潟市立寄居中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　英語部

２　郡市名　新潟市　３　会場校　亀田西中学校、小新中学校

４　研究主題

つながりのある言語活動の中で、
表現を広げ、学びを深めていく生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

新潟市中教研英語部では、一昨年度まで「主体的に学び合う生徒の育成～４技能５領域における思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～」を研究主題として研究を進めてきた。その成果として、市内の多くの学校でペア活動やグループ活動が活発に行われ、生徒同士が学び合う姿が見られている。これは、当部員の指導技術が向上してきたことに加え、新潟市がその重要性を掲げている「支持的風土」が各校において醸成されていることが一つの大きな要因だと考える。

また、新潟市は授業におけるタブレット端末の活用率が全国トップクラスであり、英語の授業でもデジタル教科書や様々なアプリケーションが効果的に活用されている。これにより、生徒たちは、より主体的に学習に取り組むようになってきている。

一方で、生徒同士のやり取りが事実を伝えるレベルに留まっていたり、「自分事」として表現するに至っていなかったりするなど、学習の「深まり」という点においては課題が見られた。

そこで、これまでの研究で培ってきた「主体的な学び」や「対話的な学び」の成果を「深い学び」へとさらに一歩進めるために、昨年度から研究主題を「つながりのある言語活動の中で、表現を広げ、深めていく生徒」とし、研究を進めてきた。県中教研が示す「深い学びの 20 の技法」の中から、当研究部の目指す「深い学び」を実現するために、特に「関連付け」、「活性化」、「探究」の３つを主要な手立てとして選び、研究主題に迫る手立てとして設定した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法）

① 教科書の題材、単元末課題等について、個々の経験と関連性を持たせるなどし、興味関心を高める（知識の関連付け）

② 獲得した知識・技能を活用し、生徒同士で発表したり、やり取りしたりする（知識の活性化）

③ 単元末課題等に向け、自分の考えについて発表や、やり取りをしながら、考えを広げ、深めていく（探究）

７　２年次の成果と課題

指定研究１年目となった昨年度は、県中教研の研究主題である「深い学び」と、これまで当研究部でテーマとしてきた教科書を活用した取組を関連付けるため、幹事間で何度も議論を重ねた。その結果、前述の研究主題と３つの手立てを設定し、研究をスタートさせた。

夏季休業中には、新潟市の採択教科書「NEW CROWN」の執筆者である群馬大学 津久井 貴之 様を講師として招いた。「深い学び」に関する講演や実践事例を紹介していただき、部員間で「深い学び」の具体的なイメージを共有することができた。

指定研究２年目となる今年度は、昨年度中から授業者と議論を重ねた。「生徒に英語でやり取りをする力を付ける授業がしたい」という授業者の思いを幹事全体で共有し、リレー授業を開始した。

７月から９月にかけて、研究推進校６校でリレー授業を実施した。それぞれの授業者が生徒に「やり取り」の力を付けるための授業とはどのようなものかを実践し、部員間で参観した。授業後には、その日の授業に関する検討会を行った後、一斉研修に向けた指導案検討を行い、一斉研修に向けて授業構想を少しずつ練り上げていくことができた。特に８月には幹事が集まり、時間をかけて公開授業の指導案検討会を行った。

一斉研修の公開授業では、リレー授業で得られた様々な成果を取り入れた授業を展開した。その後の協議会①では、KPT 法を用いたグループ協議を実施した。参加者からは、日頃の「やり取り」に関する自身の実践と照らし合わせながら、授業について様々な意見や質問が出された。

協議会②では、「深い学びに関する実践」または「新しい教科書を使った実践」のいずれかに関する実践を持ち寄り、お互いの実践を紹介し合った。どのグループも参加者が生き生きと自身の取組について紹介する姿や、他の参加者の実践に熱心に聞き入る姿が見られた。

また、協議会①で用いた KPT シート、協議会②で各自が持ち寄った実践を『ロイロノート』の資料箱に集約した。これにより、他のグループの議論の様子や実践の様子を共有することができた。

事後アンケートでは、公開授業に関しても協議会に関しても肯定的な評価な評価が多数を占めた。一斉研修全体を通して、公開授業や各校での取り組みについて、どのグループでも闊達な議論が飛び交う様子を目の当たりにした。部員が一堂に会し、授業を参観し、協議を行うことの意義は非常に大きいと確信した。

２年間をかけて、新潟市英語部が考える「深い学び」とは何か、教科書を活用しながら「深い学び」に迫るためにはどのような手立てが有効なのかについて研究を深めることができた。

8　運営の成果と課題

今年度の最大の成果は、授業者と昨年度中から緊密に連携を取り、授業者の思いを部員間で共有しながら一斉研修に向けて活動を進めることができたことである。１年次は、我々幹事の見通しが甘く、授業者の思いを部員間で共有できないままリレー授業がスタートした。リレー授業でも、何についてリレーしていくのかを明確にすることができなかった。これは、授業と同じく、明確なゴールを設定することの重要性を痛感した点である。

昨年度の反省として多くの参加者から寄せられた、一斉研修における協議会で各自が持ち寄る実践の内容や形式に関する説明が不足していたことについては、今年度から発行している新潟市中教研英語部たより『NiCE(Niigata City J.H.S. English) magazine』等を通して繰り返し情報発信を行ったことで、十分に周知することができたと考える。

また、これまでは各部員が自主的に『ロイロノート』の資料箱にアクセスしなければ閲覧することができなかった内容についても、『NiCE magazine』を通して全部員に配付した。これにより、一斉研修の授業者の思いや授業のねらい、リレー授業の成果等を発信することができた。

一方の課題は、市外からの参加者数について、会場校と情報共有が不十分であったため、資料が不足したことである。

来年度以降も、この２年間の研究で得た「授業者の思いを部員全員で共有すること」の重要性を大切にしながら、公開授業に向けた研究を進めていきたい。

資　料

1　部会名　英語部

2　郡市名　新潟市　　3　会場校　亀田西中学校、小新中学校

4　研究会開催期日　令和　7年　11月　6日（木）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター　指導主事	佐藤　優子
(2) 研究推進責任者	新潟市立寄居中学校　教諭	風間　皓介
(3) 会場校責任者	新潟市立亀田西中学校　教諭	中村　尚子
	新潟市立小新中学校　教諭	金山　乃美枝
(4) 県･郡市指導主事	新潟市教育委員会学校支援課　指導主事	齋藤　まゆみ
(5) 顧問	新潟市立潟東中学校　校長	佐々木　忠洋
	新潟清心女子中学校　校長	大上　喜彦
(6) 研究推進委員	新潟市立石山中学校　教諭	安宅　いずみ
	新潟市立白南中学校　教諭	山﨑　寛己
	新潟市立新津第二中学校　教諭	梁川　暁男
	新潟市立横越中学校　教諭	山口　麻子
	新潟市立岩室中学校　教諭	山田　可央里
	新潟市立早通中学校　教諭	室橋　幸介
	新潟市立鳥屋野中学校　教諭	藤原　壮利
（東地区会場校・授業者）	新潟市立亀田西中学校　教諭	砂井　友朗
（研究推進校）	新潟市立大形中学校　教諭	細川　和子
（研究推進校）	新潟市立岡方中学校　教諭	柳　裕季子
（研究推進校）	新潟市立横越中学校　教諭	戸枝　若菜
（研究推進校）	新潟市立木戸中学校　教諭	小田　敦子
(東地区次年度会場校・責任者)	新潟市立山の下中学校　教諭	田中　智子
（西地区会場校・授業者）	新潟市立小新中学校　教諭	石本　素子
（研究推進校）	新潟市立小針中学校　教諭	石田　陽子
（研究推進校）	新潟市立臼井中学校　教諭	保倉　裕治
(西地区次年度会場校・責任者)	新潟市立小合中学校　教諭	斎藤　敬幸

5　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/15　新潟清心女子中学校	30	研究テーマ、日程の確認等
2	7/8　大形中学校	10	公開授業① 細川　和子 教諭 3年生 Lesson 3
3	7/11　小針中学校	9	公開授業② 村山　　薫 教諭 3年生 Lesson 3
4	7/16　臼井中学校	7	公開授業③ 保倉　裕治 教諭 3年生 Lesson 4
5	8/7　新潟清心女子中学校	16	一斉研修 指導案検討会
6	9/3　岡方中学校	8	公開授業④ 柳　裕季子 教諭 3年生 Lesson 4
7	9/12　横越中学校	9	公開授業⑤ 山口　麻子 教諭 3年生 Lesson 4
8	9/25　木戸中学校	10	公開授業⑥ 中川　千寛 教諭　3年生 Lesson 4
9	9/25　小針中学校 （授業者がインフルエンザに罹患し	8	公開授業⑦ 石田　陽子 教諭　2年生 Lesson 5

回	実施日／会場	人数	主な内容
	たため、公開授業は行わず、小新中学校で指導案検討)		
10	10/23　新潟清心女子中学校	25	一斉研修　事前打ち合わせ

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　１６０　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　５　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　１４７　）名	(4) 教育委員会・センター　（　３　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　５　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　０　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年２組	Lesson 5 Translating Culture	砂井　友朗

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
協議会 第一部	公開授業に関する協議	新潟市立総合教育センター 指導主事 佐藤　優子 様	新潟市立石山中学校 教諭 安宅 いずみ	新潟市立亀田西中学校 教諭 砂井 友朗
協議会 第二部	「深い学び」または教科書を使った実践に関する協議	同上	同上	全部員

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　小黒　淳一
（学校名：　佐渡市立両津中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　英語部

２　郡市名　佐渡市　　３　会場校　佐渡市立相川中学校

４　研究主題

深い学びにいたる授業
～「深い学びの技法」を基に、生徒が自身のよさや可能性を伸ばしていく学びを通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

昨年度、佐渡市中学校教育研究会英語部では、「深い学びにいたる授業～『深い学びの技法』を基に、生徒が自身のよさや可能性を伸ばしていく学びを通して～」という研究主題を設定した。授業で言語活動がなかなか深い活動にならないという課題から、生徒が自分事として見方・考え方を働かせ、興味・関心をもちながら学びを深め、表現しようとする姿を目指した。１年次は、リレー形式での研究授業を通して、「深い学びの技法」や「深い学びにいたる生徒の姿」について理解を深めてきた。公開授業では、「人権」をテーマに自分の意見を書くという単元末課題に向け、学習モデルを用いながら蓄積した表現を活用し、同じテーマを選んだ仲間と練り合いをする姿を目指した。しかし、テーマの難しさや練り合いの視点の不明瞭さから、生徒同士の練り合いが上手く働かなかった。

そこで２年次も、１年次と同様の研究主題を設定し、「深い学びの技法」を共通の手立てとし、「深い学びにいたる授業」を実践するための有効な手立てについて、より深く探っていくこととした。１年次の課題を生かし、いくつかの「深い学びの技法」を組み合わせることにより、生徒が自分事として見方・考え方を働かせ、興味・関心と目的意識をもちながら学びを深め、表現しようとする姿を目指す。特に、「練り合い」「練り上げ」をキーワードに、既習の知識や技能を活用して、生徒自身がこだわりをもってよりよい発表内容を追求していくことを期待した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

１年次はリレー形式での研究授業を５回実施した。しかし、単元・学年・領域・深い学びの技法がそれぞれ異なっており、焦点を絞った研究ができなかった。そこで２年次は、リレー形式での研究授業の領域を、授業者の意向を踏まえ「書くこと」「話すこと」に絞り、公開授業では以下の３つの「深い学びの技法」を用いて授業を構想した。

①生徒が自分事として見方・考え方を働かせるための課題設定（深い学びの技法 No.3）

既習の知識や他教科の活動をもとに、生徒自身が興味・関心のある視点を選んで思考し、表現できるように、単元末課題を工夫する。具体的には、他教科の学習と関連付けた単元末課題を設定することで、題材や課題が生徒にとって身近なものとなり、自分事として考え、英語の知識のみならず他教科の学習で得た知識や技能も活用しながら、意欲的にアイデアを練ったり英語で表現したりすることを目指す。

②単元末課題に向けた自己表現活動の積み重ね（深い学びの技法 No.9）

単元末課題で、自分の考えを英語で表現できるようになるために、ゴールに向けて毎時間自己表現活動を積み重ねる。単元末課題に関連した表現を少しずつ積み重ねていくことで、知識や技能の定着を図る。また、生徒は単元を通して、繰り返し思考や表現をするため、知識や技能の定着だけでなく、活用が図られることを目指す。

③生徒同士や教師との間での練り合い・練り上げ（深い学びの技法 No.10）

よりよいものを追求するために、生徒が表現したものを、生徒同士や教師との間で練り合ったり練り上げたりする。練り合い・練り上げのタイミングや回数、観点や内容を工夫した中間指導を行うことで、生徒同士での学び合いが機能し、よりよい表現を目指して粘り強く考え、改善することを目指す。

7　研究の成果と課題

〈　成果　〉

・１年次の公開授業での課題として、「人権」というテーマが難しく、練り合いや練り上げが上手く働かなかったことが挙げられたが、２年次は他教科や既習事項と絡めることで、生徒にとって興味・関心と目的意識をもって取り組むことができる課題になり、生徒同士の練り合いや練り上げがしやすくなった。

・他教科と関連付けた授業を構想したことで、アイデアを練る時間を充分に取ることができ、全員が自分の考えをもって取り組み、昨年度よりも活発に粘り強く話し合う生徒の様子が見られた。

・練り合い・練り上げの場面において、ポイントを教師から示すことで、生徒はそのポイントに沿って仲間の書いた文を読み、よりよくするためのアドバイスをすることができた。

・練り合い・練り上げのタイミングや回数、内容を工夫したことで、生徒同士ではアドバイスができず停滞していたグループが、教師の中間指導をもとに活発に話し合う様子が見られた。ただ練り合い・練り上げを行うのではなく、教師が気付いたことを言語面と内容面で焦点化し、時間をこまめに区切りながら伝えることで、生徒同士では気付けなかった視点を得ることができ、よりよい表現を追求することができた。

〈　課題　〉

・「練り合い」「練り上げ」というキーワードを用いながら授業を構想したが、「練り合い」「練り上げ」の定義が人によって異なり、共通理解を図ることができていなかった。授業では、視点を一方的に提示するのではなく、生徒と共に考えて共通認識をもつことができればよかった。協議会でも、「練り合い」を「教え合い」のように捉えている様子があり、事前にそれらのキーワードについて考え、ある程度の共通理解を図ることが土台として大切だと思われる。

・「練り合い」「練り上げ」の時間が「英語を得意とする生徒から、英語を苦手とする生徒に教える」時間になっていたところもあった。また、英語が苦手な生徒同士では文法・語彙に関するアドバイスが難しく、タブレットで調べたものをよく分からないままアドバイスしている様子もあった。結果的に、練り合いや練り上げが進まず、想定していた時間内に原稿の修正ができなかった生徒もいた。練り合いや練り上げの場面に限らず、英語が苦手な生徒でも、授業の中で手応えを感じられるような手立てが必要である。

8　運営の成果と課題

〈　成果　〉

・１年次に焦点を絞った研究ができなかったことを踏まえ、２年次はリレー形式での研究授業の領域を「書くこと」「話すこと」に絞って行った。この手立てにより、リレー形式での授業者と公開授業の授業者が協働体制を築くことができ、積み重ねた研究授業での学びを授業に活かすことができた。また、１年次に比べ、１回１回の研究授業につながりを感じながら協議会での意見交換をすることができた。

・リレー形式の研究授業の協議会を、「子どもの姿をもとにした本授業の振り返り→次回の研究授業の検討→２年次授業公開の検討」の順で進め、ファシリテーションで学び合い、２年次授業公開に向けた協議を１年次よりもじっくり行い、授業者が公開授業の構想を固めていくことができた。

・１年次と同様に新潟県立教育センターの指導主事に指導者を務めていただくとともに、佐渡市教育委員会の指導主事からもご協力いただき、連携しながら授業構想の検討や研究授業の振り返りを進めることができた。

〈　課題　〉

・研究推進委員は「深い学びの技法」や「深い学びにいたる生徒の姿」について理解を深め、公開授業のゴールイメージを共有することができた。しかし、他の部員がリレー形式の公開授業に参加する機会が少なく、共通理解を図ることが難しかった。

・リレー授業の最終回から公開授業までの間に１ヶ月以上間があり、リレー授業での学びを公開授業に活かすことはできたが、研究推進委員で顔を合わせて、最終の指導案を深く検討する時間を取ることができなかった。

・県指定研究を進めるにあたり、担当する部員の業務量が多く、負担が大きかった。県指定研究の持ち方や英語部内の役割分担を再考する必要がある。

資　料

1　部会名　英語部

2　郡市名　佐渡市　　3　会場校　佐渡市立相川中学校

4　研究会開催期日　令和７年 11 月 14 日（金）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟県立教育センター　指導主事 佐渡市教育委員会　指導主事	袖山　　司 源田　洋平
(2) 顧問	相川中学校　校長	中田　浩司
(3) 研究推進責任者	佐渡市立両津中学校　教諭	小黒　淳一
(4) 会場校責任者	佐渡市立相川中学校　教頭	恩田　隆介
(5) 研究推進委員	佐渡市立相川中学校　教諭	安田　夏怜（授業者）
	佐渡市立畑野中学校　教諭	高橋　民陽
	佐渡市立新穂中学校　教諭	度會　きぬ
	佐渡市立内海府中学校　教諭	近藤　勇毅
	佐渡市立南佐渡中学校　教諭	長　　賢司
	佐渡市立佐和田中学校　教諭	平原　　光

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/24 畑野中学校	7	研究推進委員顔合わせ、２年次研究推進委員会の日程調整、２年次授業構想の共有、実施計画案の協議
2	8/1 畑野中学校	9	２年次授業構想の共有、実施計画案の協議、公開授業検討、Class の原稿確認
3	9/11 新穂中学校	10	「深い学びにいたる授業」の実践(２年生、授業者・度會きぬ)、２年次授業検討
4	9/17 内海府中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践(３年生、授業者・近藤勇毅)、２年次授業検討
5	10/1 南佐渡中学校	12	「深い学びにいたる授業」の実践(１年生、授業者・長　賢司)、２年次授業検討
6	10/9 佐和田中学校	16	「深い学びにいたる授業」の実践(３年生、授業者・平原　光)、２年次授業検討
7	11/14 相川中学校	47	２年次授業公開(３年生、授業者・安田夏怜)、協議会

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　47　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　4　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　11　）名	(4) 教育委員会・センター　（　3　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　29　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
２年A組	Lesson4 Safe Clean Water	度會きぬ	３年１組	TA! Listen4 ラジオニュース	平原　光
３年A組	Lesson4 Bollywood Movies	近藤勇毅	３年A組	Lesson6 Being Fair、Project2 30 秒 CM	安田夏怜
１年A組	Lesson4 My Summer Plans	長　賢司			

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者
「深い学びにいたる授業」を実現するために、本時の子どもの姿から、 K：有効だったこと P：気になったことや課題 T：代案や取り組んでみたいこと	新潟県立教育センター　指導主事 袖山　　司　様 佐渡市教育委員会　指導主事 源田　洋平　様	佐渡市立両津中学校 小黒　淳一　教諭

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　安中　美香
（学校名：　柏崎市立東中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　音　楽

２　郡市名　柏崎市・刈羽郡　　３　会場校　柏崎市立北条中学校

４　研究主題

深い学びにいたる、豊かな音楽性を育む授業
～生徒の音楽的な自立を目指して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生徒は、思いや意図をもって豊かに表現したり、知覚したことと感受したことの関わりについて考え、味わったりしながら、対話的（作品との対話や他者との対話）に音楽を学んでいる。やがて卒業していく生徒が、生涯にわたって音楽に親しむためには、どのような力が必要だろうかと考えたとき、音楽的な自立（生涯にわたって能動的に音楽を楽しみ、理解し、生活に生かそうとすること。またはそのためのやり方、方法を身に付けていること。）が不可欠である。義務教育９年間の学びを生かして、音楽的な見方・考え方が生活や将来における自分と音楽との関りに深く通じていることを実感させ、自ら活用できる力として育みたい。

本研究では「生徒が自分のよさや、これまでに培われた音楽性を発揮し、音楽的な自立に向かうこと」を深い学びの姿とし、音楽的な資質の向上と生徒一人一人が輝く授業づくりの具体化を目指してこの主題を設定した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

目指す学びの姿にもあるように、生徒が自分のよさやこれまでに培われた音楽性を発揮して、生徒自ら課題を見つけたり、より深い豊かな表現を求めたりすること、さらには、生徒が音楽を人生に生かそうとする姿勢を身に付け、生涯にわたって能動的に音楽に親しむため、音楽的な自立に向かう姿を目指した。

そのために、①生徒に内生した音楽的な視点を概念化し、自ら活用できる知識・技能として表現につなげる力（教師あるいは生徒の視点や気付きをつなげて、それらの関係性や意味を考え、さらに表現技法とつなげること）②他者と関わる力（音楽の練り上げを通してどのように伝え合い、合意形成するのか、人間性に関わること）の２つの力を育むことを柱として、以下の手立てを中心に授業を構築し、実践を行った。

①表現・解決の過程：「自分たちの気付きや視点をつなげたり、他との関係で考えたりしながら、概念化・言語化し、学んだ知識や技能とともに活用して、表現を追求する」

生徒たちで音楽表現を練り上げようとするとき、自分たちの気付きや視点が、音楽の要素や構造への着目、表現上の工夫の一般化、そしてこれらを結びつけて意味内容として理解（概念化）し、自分の身体を通して表現していくことが大きな課題になる。生徒は、個々の事実をどのような意味として捉えるか、その方法の獲得がまず大切であることから、授業では概念化へ導く工夫として「虫の目で見よう、鷹の目で見よう」と問いかける。ミクロからマクロに見ることで、関係性（つながり）や意味内容の理解、練習方法との関わりなどといった視点がもてるよう工夫する。

なお、概念化にあたっては、音楽の構造だけでなく、表現のための方法論との関係への気付きも大切にし、実際の音や演奏で表現できるようにする。

②解決の過程：「楽譜から深く読み取ったことと実際の音や音楽から感じ取ったことを関連付けて表現する」

楽譜から深く読み取ったことや、歌ったり聴いたりして音楽から体験的に感じとったことを生かして、強弱やフレージング、言葉との関係など、具体的な表現活動につなげる。その際、音を磨く過程（発声・発音の工夫・音の処理の仕方・正確な音高や音価）にも着目させ、音楽を様々な角度から練り上げる力を育む。手立ての①とも関連させて、曲想と音楽の構造や楽譜のより深い読み取りなどから、音楽を形づくる要素の関係性や意味を考える。

授業では、楽譜を基にしたシンプルな拡大ワークシートを用いる。また、生徒が読み取ったことや感じ取ったことを書き込んだり、直したりできるよう、フィルムシートを使用する。

③解決の過程：「仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げる」

音楽的な自立に向かっては、他者と関わる力も不可欠である。どのように伝え合い、合意形成を図るのか、音楽的な意図をもって協働する力を育みたい。自分の意図を音で表現・言語化・身体化し、仲間と試行、模倣、意図する表現をするための技能について選択、共有して、より深い音楽表現を追求する。授業では、生徒が音楽を形づくっている要素とそれらが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、既習の知識や技能を活用して、どのように表現したらよいか考え、実際の表現方法（技能）とつなげることを含め、協働的・対話的に試行できるようにしたい。また、協働して音楽を練り上げる過程や成果を価値付けることによって、音楽的な見方・考え方が生活や将来における自分と音楽との関わりに深く通じていることを実感させる。

7　研究の成果と課題

本実践でねらったことは、個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力を概念化（意味・関連性・視点）し、身体を通して（歌いながら）、協働しながら音楽表現を練り上げることによって、生きていく上で活用することである。概念化にあたっては、「虫の目、鷹の目で見よう」の手立てによって、生徒の視点をつなげ、理解の深まりとともに音楽表現を高めることができた。また、楽譜の読み取りや音楽から感じ取ったことを表現として具体化する力、他者と協働して音楽に向き合う姿勢の高まりを感じた。

課題としては、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関りを理解する上で、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みへの着目が高まった一方、歌詞から迫るアプローチが弱く、これらが両輪となって、曲想の捉え、身体へのつながりを経て、音楽表現を高めていくことが挙げられる。今後は、生徒が生きていく上で、音楽をどのように生かすか、生涯にわたって実践する力を育むため、より深い音楽の捉えと技能の向上、それらを意味内容として理解するなど、一体的に育成する授業の具現化に努めたい。

8　運営の成果と課題

昨年に引き続き、研究推進委員および、当該学校の管理職、教科領域担当校ともに、当活動へのご理解とご協力を賜り、充実した２年次の研究を進めることができた。指導者の伊野 義博 様からも、ご多用の中、授業者との対面・Zoom・メール等のやり取りで、何度もご指導を重ねていただき、授業内容について、十分検討することができたので、万全な準備で発表会当日を迎えることができた。

また、今年度は、中越地区・上越地区に広くご案内し、市外から多くの参加をいただくことができたこと、柏崎市・刈羽郡においても、全市一斉研修を「音楽科」のみ発表会当日に充てていただくことができたため、小学校の先生方からも多数参加していただくことができて良かった。さらに、協議会においては、小学校を指導している視点からも、ご意見をたくさん出していただき、充実した協議会となった。せっかく多くの貴重なご意見をいただいたが、運営の時間の都合上、グループごとの協議内容を全体で共有できなかったのは残念であった。

資　料

1　部会名　音　楽

2　郡市名　柏崎市・刈羽郡　　3　会場校　柏崎市立北条中学校

4　研究会開催期日　令和　７年　１１月　２８日（金）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟大学　名誉教授	伊野　義博
(2) 研究推進責任者	柏崎市立東中学校・教諭	安中　美香
(3) 会場校責任者	柏崎市立北条中学校・教頭	室　　稔
(4) 県･郡市指導主事		
(4) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立北条中学校・教諭	小林　良輔
	柏崎市立第一中学校・教諭	樋口　恵理子
	柏崎市立第二中学校・教諭	沼岡　恵里
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	長　　環
	柏崎市立西山中学校・教諭	今井　隆子

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/24 北条中学校	6	研究組織の確認、１年次における成果と課題、２年次の取組、具体的な計画
2	8/6　北条中学校	6	研究主題の設定、研究の方向性についての検討
3	8/19　北条中学校	6	指導案検討①
4	9/26　北条中学校	6	指導案検討②、研究発表会当日の日程、要項内容検討、必要物品の確認
5	10/27　北条中学校	6	指導案検討③、研究発表会当日の役割分担
6	11/28　北条中学校	6	研究発表会（２年次）
7	12/8　北条中学校	6	研究のまとめ

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（５０）名	(3) 小学校・高等学校教員　（１７）名
(1) 郡市内中学校会員　（１２）名	(4) 教育委員会・センター　（０）名
(2) 他郡市中学校会員　（２０）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（０）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年１組	歌唱領域『わたしたち』で表現しよう	小林　良輔

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者	授業者
①自分たちの気付きや視点をつなげたり、他との関係で考えたりしながら、概念化・言語化し、学んだ知識や技能とともに活用して、歌唱表現を追求していたか。 ②楽譜から深く読み取ったことと、実際の音や音楽から感じ取ったことを関連付けて表現できていたか。 ③仲間と協働して一人一人の思いに基づく表現をすりあわせながら、新しい表現を創り上げていたか。	新潟大学　名誉教授 伊野　義博 様	柏崎市立鏡が沖中学校 長　環　教諭	柏崎市立北条中学校 小林　良輔　教諭

令和　７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　関　裕子
（学校名：　新潟市立木戸中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　　音　楽

２　郡市名　　新　潟　　３　会場校　新潟市立新津第一中学校

４　研究主題

感性を働かせて、仲間と共に音楽に関わり続ける生徒の育成

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生徒は、思いや意図をもって表現を追求したり、感じ取ったことを基に音楽のよさを見いだしたりする活動を通して、主体的に音楽に親しんでいる。また、思いや感じ取ったことをお互いに交流し合うことを通して、仲間と共に音楽のもつ良さを明らかにしようとしている。

これまで音楽科の実践を基盤に、感性を働かせて主体的に音楽に関わる活動を通して、曲想、音楽の構成の仕組み、音楽の背景などを関わらせて、音楽のもつよさや価値を明らかにしていく生徒を育成したいという願いから、この主題を設定した。

目指す深い学びの姿として、習得・活用・探究という学びの過程の中で、音楽科の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解させ、思いや意図をもとに他者と協働しながら音楽表現を追求する場面を設定した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

目指す深い学びの姿にもあるように、生徒が習得した知識を自ら活用し、仲間との関わりの中でさらに理解を深めるような活動を通して、主体的に音楽と関わり続ける生徒の育成を目指した。

そのために、「課題を設定する場面」「思考する場面」「表現（アウトプット）する場面」に重点を置き、目指す生徒の姿に迫るために以下の課題設定を研究の中心的手立てとして、生徒の主体的な姿を引き出す実践に繋げた。

①課題設定：「視点・観点・論点を具体的に設定し、思考や表現に繋げる」

教師が課題を設定する場面において、「何を考えればよいか」「どのような視点で考えればよいのか」を明確にすることで、生徒の学びの方向性をしっかりと定めた。そのためには、自己調整学習など自立して学ぶ力が求められる。音楽を苦手とする生徒が「進んで学びたい」と思えるように教師が具体的な視点を分かりやすくして課題を与えるなどの工夫をした。公開授業では、通常授業を行っている音楽室ではなく、音響の良い広い教室で、演奏者や音源にこだわった「ブルタバ」を鑑賞した。

②思考場面：「仲間と協働し、資料やデータに基づいて考察したり検証したりする」

音楽における鑑賞や創作活動の際に、より多くの資料やデータを教師が準備し提供することで、生徒が自ら必要なものを選択・応用し、課題解決に近づこうとする姿を目指した。そのための生徒への手立てとして「見方・考え方」を働かせるために、資料やデータに基づいた考察や検証をすることに重点を置いた。さらに、それらの活動を他者と協働して行うことで、様々な価値観に触れさせ、深い学びに繋げた。公開授業では、生徒が普段目にすることのないオーケストラスコアを準備し、「ブルタバ」のどの場面の演奏か、スコアを見ながら演奏を聴くことを通して、オーケストラの奏でる音色を曲の背景などと関わらせて聴き取る場面を設定した。

③表現場面：「理由や根拠を示して理論的に説明する」

生徒が学んだことを表現（アウトプット）する場面において、自らの言葉で学んだことを整理し、まとめる場面を設けた。公開授業では、オーケストラスコアを活用し、音楽の構成や仕組み、音楽の背景など関わらせて聴き取り、理由や根拠を示すことを意識させ、学びの深化を図った。

また仲間との音楽活動を通して様々な意見や感想、評価を得ることで自らの思いや意図を理論的に表現する力をのばし、聴き手に伝わる表現力を向上させた。

7　研究の成果と課題

今年度の公開授業に向け授業者は、令和 6 年 10 月に長岡市で行われた「関東甲信越音楽教育研究会」、11 月に柏崎市で行われた「県指定研修上越会場」に参加し、研究の成果を共有し、今年度の授業に向けて準備を行ってきた。

2 年間続けて　新潟青陵高等学校副校長　高橋　恒彦様を指導者としてお招きし、昨年度ご指導いただいた【音楽科の授業づくり】での焦点となった『今、求められている音楽の授業は何か』『音楽活動の楽しさや学びの意義とは』『音楽的な見方・考え方』など音楽の授業づくりの要をはっきりとさせ、教科目標のポイントを確認できる授業構成を考え準備してきた。

音楽部の部会の重点『音楽のよさを感じ、伝え、関わり合いながら学び、考える授業を展開する』を意識した公開授業を行った。近年一人一台端末活用により、鑑賞授業の聴き取り方法の幅が広がった。公開授業では、音響の良いスピーカーを準備設置し、普段行っている音楽室ではなく広いスペースの教室でオーケストラの演奏を一斉に同じ音源で仲間と聴き取った。教科書に掲載されている簡易楽譜ではなく、普段目にすることのないオーケストラの楽譜を活用することで各楽器が奏でる音色を、オーケストラスコアを見ながら鑑賞することができ、一人一人聴き取りを深めることができた。

主旋律グループとその他のグループに分け、各自が聴き取った内容を記入したスコアを広げながら、根拠をもとに思ったことや感じたことを伝え合い、仲間と話し合いができる時間を設定した。

授業後の講演会では、学習指導要領の内容を再確認し『今、求められている授業』のお話をいただいた。すぐに実践で活用できるような資料を提示していただき、発問と指示を実践しながらの講演内容で参加者から大変好評であった。

8　運営の成果と課題

県指定 1 年目と 2 年目の研究校と授業者を変えた。違う学校で違う授業者が取り組むことで、様々な視点で研究に取り組むことができたのではないかと感じている。また 2 年間、附属新潟中学校の研究会にも参加し市内の音楽科だけでなく大学の指導者や大学生との協議を通して色々な面から教師の学びを深めることが出来た。県指定 1 年目の鳥屋野中学校で行われた一人一台端末活用の創作の授業では、県立・市立・私立の高等学校音楽教諭にも参加していただき、協議会では「学び合う授業の考え方」について活発な意見交換をする姿が見られた。2 年目は 6 年ぶりに授業会場に会員から集まっていただき、拡大指導案方式のファシリテーションを行い、活発な意見交換をすることができた。

1 年目の授業公開では、駐車スペースの関係で、幹事以外の会員についてはオンラインで授業を参観していただいた。教育関係業者に依頼し、様々な面でサポートをしていただいたが、生徒の様子が伝わりにくい、表現している音が聴き取りにくいなど厳しいご意見をいただいた。今年度は、参観者に参観の仕方について希望をとり、駐車スペースを考えながら準備を進めた。対面を中心としながらも、遠方からの参加者の負担も考え、今年度も教育関係業者の協力をいただきながらオンライン開催も行った。映像や音声など昨年の反省を活かし準備を行い、トラブルなく終了することができた。

資　料

1　部会名　音　楽

2　郡市名　新　潟　　3　会場校　新潟市立新津第一中学校

4　研究会開催期日　令和　7年　11月　6日（木）

5　研究推進委員会

役　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	新潟青陵高等学校・副校長	高橋　恒彦
(2) 研究推進責任者	新潟市立木戸中学校・教諭	関　裕子
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第一中学校・教頭	渡部　睦
(4) 県･郡市指導主事		
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立新津第一中学校・教諭	和田　卓之
	新潟市立新津第一中学校・教諭	鈴木由美子
	新潟市立亀田中学校・主幹教諭	稲村　直輝
	新潟市立高志中等教育学校・教諭	春日　亜樹
	新潟市立新津第二中学校・教諭	山崎　園子
	新潟市立東新潟中学校・教諭	齋藤　恵美
	新潟市立西川中学校・教諭	高橋　翔
	新潟市立小新中学校・教諭	坂上　葉
	新潟大学附属新潟中学校・教諭	松川　知樹

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/12 高志中等教育学校	11	県中教指定研究 2 年目概要説明・役割分担確認
2	6/26　附属新潟中学校	4	新潟大学附属新潟中学校　授業参観・意見交換会
3	8/21 新津第一中学校	10	Class 原稿確認・授業会場下見・指導案検討
4	9/11 新津第一中学校	10	指導案検討・協議会準備
5	10/16 新津第一中学校	8	指導案検討・協議会準備
6	10/30 新津第一中学校	5	プレ授業
7	10/31 鳥屋野中学校	2	要項・表示準備
8	11/6 新津第一中学校	11	研究授業当日
9	12/15 木戸中学校	5	成果の概要報告書作成

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（	６５）名	(3) 小学校・高等学校教員　（	）名
(1) 郡市内中学校会員　（	６０）名	(4) 教育委員会・センター　（	2）名
(2) 他郡市中学校会員　（	3）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（	）名

8　公開授業

学年・組	題材名	授業者
3 年 2 組	鑑賞：連作交響詩「わが祖国」からブルタバ（モルダウ）	和田　卓之

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第 1 分科会	音楽科の授業づくり （鑑賞）	新潟青陵高等学校 副校長　高橋　恒彦 様	新潟市立亀田中学校 主幹教諭　稲村直輝	当校教諭 和田　卓之

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　平川　剛志
（学校名：　長岡市立西中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　中越地区・保健体育部

２　郡市名　長岡市三島郡　３　会場校　長岡市立秋葉中学校

４　研究主題

自己を客観的に捉え、課題解決に向けて深い学びにいたる授業の工夫

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」であり、３つの具体的な目標が示されている。

それらの目標を達成させるために授業では様々な手段を展開していくが、その中で保健体育科の永続的な課題の１つに「できる」と「わかる」がつながらないということがあげられる。技能が向上し、記録が伸びたりパフォーマンスが向上したりするが、なぜできたのかを説明できなかったり、技能のポイントやコツを理解しているのになかなか技能に結びつかなったりする現状がある。また、できていないのにできていると思っていたり、できているのにできていないと思ったりする生徒もいる。今回、そのずれている認識をまとめて『様々なずれ』と呼ぶことにする。当会では、その『様々なずれ』があることを前提に、これらを解消するために考え試行錯誤していくことが深い学びに至る過程ではないかと考えた。また、その『様々なずれ』を解消させるためにまず必要なのは、自己の技能の客観的な認知であると考え、自己（ここでは自分の所属するグループも含む）の技能や状態を認知させ、深い学びにいたる授業の工夫を主題と設定した。

また、今年度、県中学校教育研究会では、「深い学びにいたる授業」を研究主題とし、それを受け当会は保健体育科における深い学びの姿を、『保健体育科の目標を達成させるためにどうすればよいかを考え試行錯誤しながら実践する姿』と考えた。なぜできたのだろうか、なぜできないのだろうか、技能のコツやポイントは何だろうか、技能と思考や知識のずれを解消するために深く考え、実践していく姿を目指したい。そのために必要なことは、自己や自分のグループの姿を客観的に捉えることだと考えた。自己や自分のグループの姿を客観的に捉えることで、自己理解、相互理解が進み、課題がより明確になる。その課題を解決するために、自主的に活動に取り組む姿に期待する。この流れを大切にし、繰り返していくことで深い学びにいたる姿の実現を目指す。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

球技「バレーボール」の実践である。バレーボールは、ボールを落とさずにつなげることやゲームで勝敗を競うことで楽しさを味わうことができる球技である。ゲームを展開させるために個人技能の獲得が必要であるとともに、チームの作戦や判断が大切になる。そこで、今回はそんなバレーボールの『攻撃パターン』の実践で以下の視点で自己（自グループ）を客観的に捉えることについて研究する。

①客観的に捉えるためのツールの有効性はどうだったか。
②客観的に捉えるための授業の展開や工夫はどうだった。

③客観的に捉えることで、課題の解決につながっているか。
④客観的に捉えることで、新たな課題の発見にいたっているか。
⑤客観的に捉えることで、深い学びにいたる生徒の姿が見られたか（深い学びの技法との関わりを含む）。
　また、深い学びにいたる授業づくりの中心的な手段として、早稲田大学教職大学院の田中博之教授が提案する「深い学びの 20 の技法」を取り入れる。その中で、今回バレーボールの単元で取り入れる技法は以下の通りである。
＜設定＞③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする。
＜解決＞⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする。
　　⑩仲間と練り合いや練り上げをする。
＜表現＞⑬理由や根拠を示して論理的に説明する。
　　⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる。
この技法を手段の中核として研究を進める。

7　研究の成果と課題
○“客観視”をテーマに研究を進めてきたが、技能の獲得や向上ために必要なポイントであると考え、深い学びにいたる可能性の高いものであると捉えた。
○“客観視”するために「タブレット PC」と「ワークシート」を活用した。自分たちの動きを見ながら考えたり、うまくいったかどうかをワークシートに記録したりすることで、話し合い活動がよりスムーズにいき、客観視のためのツールとしてとても有効であったと考える。
○映像を見ることは、自身のもつイメージとのズレがわかりやすく、ポイントを見付けやすかったと考える。
○失敗した試技の際に、映像を見ることで、なぜ失敗したのかという原因を探す場面が見られた。
○遅延カメラを使用したが、即時フィードバックができることで、上達のきっかけとなっていた。
○“客観視”のために、成功率をワークシートで確認したが、目標をもちやすくわかりやすかった。また、上達の変化がわかりやすく、意欲の向上にもつながった。
○ボールの軌跡（動き）を示すワークシートはチームの課題が分析しやすく、話し合いのきっかけになった。また、記入する係の生徒はより思考の高まりにつながった。
○作戦タイムでは駆使したツールをもとに議論がなされ、それが次の練習につながり、目標がより明確なものとなった。
△記録を違うチームの生徒にとってもらったが、お互いにアドバイスをし合うような他者視点の振り返りの時間があると良かった。

8　運営の成果と課題
○少人数で積極的に話し合いながら運営することができた。
○授業者の思いや考えを丁寧にくみ取りながら研究を進めるために、研究推進委員と授業者・会場校の密な連絡や打ち合わせを行うことができた。
○研究会当日の細かなスケジュールの調整や、役割分担を行ったことで、それぞれの役割に責任をもって取り組むことができた。

資　料

1　部会名　中越地区・保健体育部

2　郡市名　長岡市三島郡　　3　会場校　長岡市立秋葉中学校

4　研究会開催期日　令和　7年　10月　22日（　水　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟大学・准教授	檜皮　貴子
(2) 研究推進責任者	長岡市立西中学校・教諭	平川　剛志
(3) 会場校責任者	長岡市立秋葉中学校　・　教頭	阿部　共博
(4) 県･郡市指導主事	長岡市教育委員会　・　指導主事	川口　健児
(4) 研究推進委員(授業者)	長岡市立秋葉中学校　・　教諭	早川　菜津美
	長岡市立大島中学校　・　教諭	伊藤　裕也
	長岡市立宮内中学校　・　教諭	皆川　由佳
	長岡市立小国中学校　・　教諭	大矢　洋美

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5 月 19 日/さいわいプラザ	5	○研究の方向性について ・昨年度の研究の成果と課題 ・県中教研の方針の確認
2	6 月 25 日/さいわいプラザ	5	○授業者（秋葉中　早川先生）の授業構想・題材構想 ・研究主題、研究内容の検討 ・指導案検討
3	7 月 16 日/大島中学校	5	○推進委員（大島中　伊藤先生）による授業・協議会
4	9 月 29 日/西中学校	4	○推進委員（西中　平川先生）による授業・協議会 ○準備分担確認
5	10 月 17 日/秋葉中学校	5	○事前準備
6	10 月 22 日/秋葉中学校	5	○授業者（秋葉中　早川先生）による授業 ○全体会　○協議会　○全体指導（指導者　新潟大学　檜皮先生より）
7	11 月 14 日/さいわいプラザ	5	○２年間の研究のまとめ

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　４５　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　0　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　３６　）名	(4) 教育委員会・センター　（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　8　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　0　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３年１組	球技『バレーボール』	早川菜津美

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者	授業者
①客観視の可能性 ②ツールの有効性 ③深い学びの様子・生徒の姿についてそれぞれ考える	新潟大学　教育学部 准教授　檜皮　貴子様	長岡市立宮内中学校 皆川　由佳	長岡市立秋葉中学校 早川　菜津美

令和７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　菅原　久代
（学校名：　胎内市立黒川中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　保健体育部

２　郡市名　阿賀野市・胎内市・北蒲原郡　３　会場校　聖籠町立聖籠中学校
（胎内市立黒川中学校）

４　研究主題

深い学びの技法を用いて生徒の良さを引き出す授業実践 ～　生徒が主体的に学び合う授業を通して～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

「深い学び」とは、習得・活用・探求という学びの課程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考え方を形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることとされている。（2016 中央教育審議会答申）

２年間の研究をとおして、「深い学びの 20 の技法」を手立てとし、生徒たちが主体的に学び合う中で、ただ技が「できる・できない」というだけではなく、自己の適性や役割に応じた「する」「みる」「支える」「知る」の多様なかかわりができるという生徒のよさを引き出す授業をつくりたいと考え、本研究主題を設定した。

体育の「見方・考え方」とは、「その運動の価値や特性に着目して、『楽しさや喜び』とともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性や役割に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかかわり方と関連付けること」である。

本研究では、『楽しさや喜び』とは、単に「技ができた」というだけでなく、「技をできるようにする過程」でも味わうことができると考えた。そして「技をできるようにする過程」において、自己の課題の技に応じて、「する」「みる」「支える」「知る」などの多様なかかわり方ができれば、たとえ運動が得意でなくとも、保健体育科の目標を達成することが可能であると考えた。以上のことから、目指す深い学びの姿を、

○　自他の課題を言語化する姿
○　課題解決を目指し、Ｒ－ＰＤＣＡサイクルを活用して取り組む姿　とした。

また、「する」「みる」「支える」「知る」の具体的な姿として、以下のように設定をした。

かかわり方	具体的に目指す姿
する	・Ｒ－ＰＤＣＡサイクルを活用して実践していく姿 ・トライ＆エラーする姿
みる	・技のポイントや観察する視点を整理して観る姿
支える	・仲間への補助や助言、励ましや声がけで失敗しても大丈夫な雰囲気をつくる姿
知る	・比較、対話を通じて自他の課題を言語化する姿 ・技のポイントを知り、比較することで、考察・検証する姿 ・論理的に説明し、振り返りをする姿

6　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

＜設定＞④Ｒ－ＰＤＣＡサイクルを設定して活動や作品を改善する
＜思考＞⑥複数の資料や観察結果の比較から結論を導く
＜表現＞⑮自分の言葉で学んだことを整理してまとめる
＜評価＞⑱身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる

学びの技法に関しては、上の４つの技法を取り入れて研究を進めた。また、１年次の課題から、以下の４つの点を見直した。

①「見る視点」を生徒に与えるための、【見本動画の作成】と【技カードの作成】。
②ICT の使い方や見方指導を行うための時間の設定。
③できる生徒もできない生徒も主体的に授業に取り組めるための【単元計画の見直し】と【STEP UP 制度】の導入。
④資料を用いて比較・対話を行うための【分析 TIME】と【STEP UP TIME】の導入。

7　研究の成果と課題

協議会・事後アンケートでは、【目指す姿は達成できたか】に対しては、参観者の 99%が「達成できた」と答えた。また、【目指す姿達成のための手立てがどうだったか】に対しても、「ICT、学習カードが特に有効だった。見る視点が絞られたことによって、生徒同士が比較をしていた。その対話が課題解決を促していた。また、STEP UP TIME 及び分析 TIME も、目指す姿の達成に大変有効だった。」という意見が寄せられた。【生徒はマット運動の得意・不得意にかかわらず主体的に授業に取り組めていたか】に対しては、「どの生徒も主体的に学習に取り組めていた。生徒が自己調整し、自走できる授業の構造ができていた。対話を生み、主体的に取り組むためには、生徒が理由や根拠を理解していることが必須であり、そのためには教師の導きが大切。」という意見があった。

今年度、県中教研の指定研究２年目として、昨年度の課題を踏まえて研究を推進してきた。昨年度の課題として生まれた「見る視点」を身に付けるために考えてきた様々な手立てが有効だったことを実感している。

参観者からの事後アンケートに「授業終わりの生徒から、もっとやりたいという言葉が出てきたことがすべてだったと思います」という記述があった。「体を動かすことが楽しい」「授業が楽しい」と、生徒が感じる授業づくりを進めることが、保健体育の授業づくりを行う上で一番大切なことなのだと改めて感じた。

8　運営の成果と課題

７回の研究推進委員会と、公開授業に向けて４回のプレ授業、指導案検討として１回、事前打ち合わせとして１回の保健体育部会を行った。夏に行った郡市の保健体育部会では、所属する保健体育科の先生方からたくさんの意見をもらうことができとても有意義であった。

本来、聖籠中学校で授業を公開する予定だったが、急な感染症拡大により、場所を黒川中学校に変更して行った。プレ授業で１度授業を公開していたクラスでの公開になったが、会場校である黒川中学校の協力のおかげで、無事に開催することができた。

今回製作した教材に関して、「ぜひ使わせてほしい」という意見をいただいたため、Tearoom に投稿した。それぞれの行った研究の成果が、何らかの形で共有されていければ、多くの教員にとって良いのではないかと考える。

資　料

1　部会名　保健体育

2　郡市名　阿賀野市・胎内市・北蒲原郡　3　会場校　聖籠町立聖籠中学校
（胎内市立黒川中学校）

4　研究会開催期日　令和　8年　11月　20日（　金　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	村上市教育委員会・指導主事	只木　雅実
(2) 研究推進責任者	胎内市立黒川中学校・教諭	菅原　久代
(3) 会場校責任者	聖籠町立聖籠中学校・教頭 (胎内市立黒川中学校・教頭)	田中　健太 (中野　貴広)
(4) 研究推進委員(授業者)	聖籠町立聖籠中学校・教諭 (胎内市立黒川中学校・教諭)	小竹　武志 (菅原　久代)
	胎内市立黒川中学校・校長	村田　健
	阿賀野市立京ヶ瀬中学校　・　教諭	半藤　圭輔
	阿賀野市立水原中学校　・　教諭	佐藤　悠雅
	阿賀野市立笹神中学校　・　教諭	外山　東子

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月2日/聖籠中	8	第１回研究推進委員会 今年度の流れの確認、指導案構想
2	7月22日/聖籠中	8	第２回研究推進委員会 指導案の確認、単元計画・本時の確認等
3	8月8日/黒川中	13	第３回研究推進委員会　※二市北蒲中教研保健体育部会を兼ねる 指導案検討①、教材の作成
4	9月2日/聖籠中	6	第４回研究推進委員会 指導案検討①からの変更点の確認、指導案検討②
5	10月6日/京ヶ瀬中	4	プレ授業①　→　検討会 半藤教諭による本時の授業の公開
6	10月9日/笹神中	3	プレ授業②　→　検討会 外山教諭による本時の授業の公開
7	10月10日/水原中	5	プレ授業③　→　検討会 佐藤教諭による本時の授業の公開
8	10月16日/黒川中	5	第５回研究推進委員会 黒川中でのプレ授業参観、プレ授業を終えての指導案検討③
9	11月10日/聖籠中	7	第６回研究推進委員会 最終打合せ、準備
10	11月20日/黒川中	45	研究発表会 研究概要の説明、授業公開、協議会、ご指導
11	11月21日/黒川中	5	第７回研究推進委員会 ２年間の成果と課題

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数　（　45　）名	(3) 小学校・高等学校教員　（　1　）名
(1) 郡市内中学校会員　（　22　）名	(4) 教育委員会・センター　（　3　）名
(2) 他郡市中学校会員　（　19　）名	(5) その他（地域・保護者の方）　（　　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
１年１組 １年２組	器械運動「マット運動」	菅原久代			

9　分科会（全体協議会）

協議題	指導者	司会者	提案者
・目指す姿は達成できたかどうか ・目指す姿を達成するための手立てが有効だったかどうか ・生徒はマット運動の得意・不得意にかかわらず主体的に授業に取り組めていたかどうか	村上市教育委員会 学校教育課 指導主事 只木　雅実 様	阿賀野市立京ヶ瀬中学校 半藤　圭輔　教諭	胎内市立黒川中学校 菅原　久代　教諭

令和６・７年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　米山　優子
（学校名：　上越市立頸城中学校　）

このことについて、下記のとおり報告します。

1　部会名　学校保健

2　郡市名　上越地区　　3　会場校　上越市立吉川中学校

4　研究主題

自他を認め合い、対話を通して主体的に学ぶ心の健康教育
―伝え合う場を充実させる「課題設定」の工夫―

5　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

当該校の生徒は、小学校から固定化された人間関係の中で学校生活を送っているため、新たな人間関係を築く経験が不足している。このことから、人間関係のトラブルによるストレスを抱え、体調不良を訴える生徒も見られている。また、全体的に自己肯定感が低い傾向にあるため、他者を肯定的に捉え優先する一方で、自分を否定的に捉える傾向が見られる。自分の気持ちをうまく表現することや他者と円滑なコミュニケーションをとる点に課題を抱えている。

「こころのアンケート」で実施した「中学生用のレジリエンス尺度」によると、「困ったときに良い方向に考えたり、行動に移したりすることができない生徒」や「ネガティブな感情を持ったとき、自分一人で抱え込んでしまう生徒」などが多い傾向にある。困難やストレスを感じるような場面、あるいは気持ちが落ち込みなかなか気持ちを切り替えられないときなど、直面した課題に自分なりの解決方法を見いだしていくことができるよう指導していきたいと考えている。

そこで、今回の指定研究では、①生徒が健康に関する課題を「自分事」として捉え、②「対話」を通じて思考を深めたり、③保健の授業で学習した知識やスキルを生かしたりしながら、実際の生活場面で適切な意思決定や行動選択ができるよう、研究主題を設定した。

本研究では、学級活動をはじめとする特別活動において、指導の効果を高める、①養護教諭の専門性を生かした直接の指導を取り入れ、②学級担任と養護教諭が連携・協働し、ティームティーチング（TT）で集団を対象とした保健指導を行うことで、指導効果をより一層深めることが有効であると考えます。

さらに、新潟県中学校教育研究会で示している深い学びに向けた授業実現のため、3 つのキーワードを中核に据えて研究を推進した。

1 主体的に取り組む（自分事として捉える）姿
2 生徒と授業者、生徒と生徒が対話する（多面的・多角的な視点を持つ）姿
3 自己実現に向けて考えを深める姿

【学校保健における「学び合う授業」について】

学び合う授業は、生徒が将来、健康で自分らしく生きていくために、心身の健康や健康的な生活について主体的に学び、思考し、判断し、表現・行動していく力を育むことが欠かせないという認識に基づくものである。

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、生徒が仲間と関わり合いながら健康課題の解決を目指し、資質・能力を育む授業実践を考えた。

これは、生徒同士が関わり合い、学び合う学習過程に着目した授業を通じ、単に知識を伝えるだけでなく、生徒が自他の命や健康の価値を見いだし、溢れる情報を吟味し、行動選択ができるようになることを目指した。

6　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

１年次の成果として、他者の意見を尊重する意識は高まったものの、自己肯定感の低さという課題が残った。そこで、円滑な人間関係構築のための具体的なコミュニケーションスキルを高める手立てが必要と考え、対話を重視した研究主題へと変更して取り組んだ。

（1）心の健康教育に関する全体計画の作成

（2）教育期に合わせた心の健康教育の取組

年間を通じて設定された「教育期」と連動し、特別活動（教育期集会等）を通じて心の健康に関する指導を行ってきた。教育期における心の健康教育は、レジリ

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
教育期	Ⅰ 基礎づくり期		Ⅱ 挑戦・自立期		Ⅲ 協力・創造期		Ⅳ 学習充実・進路決定期		Ⅴ まとめ・新生期		
集会テーマ	学校生活の基盤となる生活リズムを整える		学習と部活の両立に燃える		仲間とともに行事を成功させる		自己を見つめ、進路について考える		1年を振り返り、新たな目標を立てる		
主な教育活動	・体育祭		・メディアセーブ週間①		・OKAMI遠足 ・音楽祭 ・いじめ見逃しゼロスクール集会 ・メディアセーブ週間②		・小中合同学校保健委員会 ・コミュニケーションスキルの授業		・メディアセーブ週間③		
学級活動	・生活リズムと健康		・メディアと健康について ・生活習慣病予防講座		・薬物乱用防止教室 ・歯肉炎予防教室		・命・きずなを考える講座		・インフルエンザの予防 ・健康生活の反省		

エンスの育成を土台とし、学期ごとの目標に応じた集団活動や、具体的なコミュニケーションスキル指導を通して、生徒が自他を認め合いながら主体的に生活できる力の育成に重点を置いて指導を行った。

（3）授業実践の実施「アサーションを取り入れた授業」

研究究推進委員会では、一回ごとのプレ授業を積み重ねることで、生徒の学びの姿や課題などを明確にした。そして、そこから得られた改善点をもとに、より深い学びを生み出す授業を作り上げることを目指した。

研究会当日の授業風景

題材名	「自分も相手も大切にするコミュニケーションのあり方を考えよう」
ねらい	・班での意見交換を通して、自他を尊重するコミュニケーションのあり方について、自分なりの考えを持つことができる。(知・技) ・班のメンバーと協働して考えた自分の気持ちの伝え方を、想定される実際の場面に生かすことができる。(思・判・表)
授業づくりの工夫点	●学習課題に対し、生徒にいかに必要感をもたせるか検討を重ねた。 ●生徒の身近な場面を設定し、「自分と相手」が共に気持ちのよい伝え方(アサーティブな表現)を考える。 ●学習活動を「個人」⇒「グループ」⇒「全体」⇒「個人」と設定し、深い学びにつなげる。 ●生徒の発表場面の設定と発表内容を活用した学習内容の整理・まとめの過程をどのように示すか。 ●葛藤場面を提示し、生徒がその状況をどのように捉え、どんな感情を持つか(捉え方、感情)を考察する。

7　研究の成果と課題

＜成果＞

（1）継続的な実践による生徒の明確な成長と変容

○1 年次からの積み重ねが、研究授業における生徒の主体的な姿につながっていた。

○生徒が話し合いを通して断り方のコツを見つけ、他者を大切にした気持ちの伝え方を考え、自分の言葉で表現できていた。

○授業中の生徒の様子が穏やかで、お互いに自分の考えを伝え合っている様子から、教員と生徒の温かい関係性が見られた。

（2）学校全体での組織的な取組とカリキュラムの連動

○心の健康は学校全体で取り組む必要があり、各立場の教員（担任や養護教諭など）の専門性が生かされていた。

○教育課程と連動した心の健康教育が実施されたことで、学校全体の取組が授業で生かされていた。

○ライフスキル教育を系統立てて、継続して行う取組が実際の生徒の変容につながった。

（3）養護教諭の専門性

○養護教諭が専門性を生かし、心の健康教育に関わることの重要性について学ぶ機会となり、教諭とTT（チームティーチング）で実施している授業を見る良い機会になった。

＜課題＞

（1）日常生活への応用と持続性

●実際の日常生活にどの程度生かすことができるのかという点について、今後の生徒の姿を注視する必要がある。

●グループの意見を共有する場で、「自分も大切にし、他人も大切にする」という考え方はよく理解された一方で、生徒の内面的な思考をさらに引き出す必要性があると感じた。

（2）指導内容・教材設定の難しさ

●生徒が自分事として捉えられるような場面設定を考えるのが難しいと感じた。

●スキルを学ぶことは大切だが、教員の「思い」を言語化し、生徒に伝えることで、生徒の心に残ると考えられる。また、教員のモデリングや自己開示の重要性も重要であると感じた。

●養護教諭として、子どもたちの実態把握や担任との情報交換の重要性を再認識した。

8　運営の成果と課題

＜成果＞

○会場校責任者も研究推進委員会に同席し、研究会当日までの日程や流れ、準備計画までを詳細にわたり一緒に確認しながら進めることができた。

○研究会当日に向けて、研究推進委員会で授業をブラッシュアップしながら授業実践を作り上げていくことができた。

○研究会当日の授業公開だけではなく２年間の研究の成果や授業実践を展示し紹介したことで、今まで積み重ねて実践してきたことを広く知ってもらう機会となった。

＜課題＞

●研究推進委員会を立ち上げることから始まるため、組織が機能するまでには時間を要した。

●研究主題を受けて、学校保健における「学び合う授業」をどう作っていくか、生徒のどんな学びの姿を求めているのか等、授業づくりを進めることが大変だった。

●市教研と連携して研究会を開催することで、より多くの参観者を集めることができる。さらに、授業を参観できる貴重な機会であることを早めに PR できるとよかった。

資　料

1　部会名　学校保健

2　郡市名　上越　　3　会場校　上越市立吉川中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11　月　19　日（　水　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　名
(1) 指導者	学校法人 北陸学園　講師	中村　直美
	上越市教育委員会　指導主事	板垣　希望
(2) 研究推進責任者	上越市立頸城中学校　養護教諭	米山　優子
(3) 会場校責任者	上越市立吉川中学校　教頭	八木　清美
(4) 研究推進委員（授業者）	上越市立吉川中学校　教諭	渡邊　高明　（授業者）
	上越市立吉川中学校　養護教諭	竹内　美穂子　（授業者）
	上越教育大学附属中学校　養護教諭	髙橋　由子
	上越市立八千浦中学校　養護教諭	丸田　史恵
	上越市立柿崎中学校　養護教諭	寺澤　弘美
	上越市立潮陵中学校　養護教諭	原　楓

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/ 2　吉川中学校	3	２年次の研究計画の推進について
2	6/ 3　吉川中学校	8	２年次の研究計画の確認　日程の詳細の確認
3	6/26　頸城中学校	7	頸城中でのプレ授業参観①(本時題材)　協議会 授業者：米山優子(養護教諭)、内田彰尚(教諭)
4	7/17　柿崎中学校	9	柿崎中でのプレ授業参観②(本時題材)　協議会 授業者：寺澤弘美(養護教諭)、東條望美(教諭)
5	8/21　吉川中学校	7	研究会に向けての指導案検討　研究会当日に向けて
6	9/11　吉川中学校	11	吉川中でのプレ授業参観③(研究会当日題材)　協議会 授業者：竹内美穂子(養護教諭)、新保南歩(教諭)
7	10/ 7　吉川中学校	10	研究発表会指導案検討　研究会に向けての準備･流れ･運営の確認
8	11/19　吉川中学校	45	研究発表会

※　「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　45　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　11　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　20　）名	(4) 教育委員会・センター	（　1　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　12　）名	(5) その他（地域・保護者の方）	（　1　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
３学年	学級活動 「自分も相手も大切にするコミュニケーションのあり方を考えよう」	渡邊　高明　教諭 竹内美穂子　養護教諭

9　分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	①課題提示や授業展開は深い学びにつながる手立てとして有効であったか ②生徒同士のかかわり合う姿は、深い学びにつながる活動であったか ③心の健康教育推進とカリキュラムマネジメントについて	学校法人 北陸学園 講師　中村　直美 様 上越市教育委員会 学校教育課 指導主事 板垣 希望 様	上越市立柿崎中学校 養護教諭 寺澤　弘美	上越市立頸城中学校 養護教諭 米山　優子

令和　６・７　年度　県中教研指定研究　成果の概要報告書（２年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名　渡邊　秋子
（学校名：　新潟市立新津第一中学校　　）

このことについて、下記のとおり報告します。

１　部会名　学校保健

２　郡市名　新潟地区　　３　会場校　新潟市立東石山中学校

４　研究主題

健康的な生活の行動化を促す保健教育
～ ヘルスリテラシーの向上を目指して ～

５　主題設定の理由と目指す深い学びの姿

GIGA スクール構想による一人一台のタブレットの配付やスマートフォンの急激な普及により、生活習慣の乱れや運動不足からくる体調不良などの現代的な健康課題は、ますます深刻化している。また、SNS や生成系 AI（ChatGPT など）の利用も広がりつつある中、信頼できる健康情報を自ら見極め、意思決定し、活用する力、すなわち「ヘルスリテラシー」の育成が求められている。

ヘルスリテラシーとは、健康情報に基づいて意思決定できる力であり、意思決定とは問題を解決するための行動である[1)]。自ら得た情報を理解し評価するだけでなく、それらを他者との対話や協働的な学びを通して考えを深め、自分なりの意思決定をすることで主体的に行動を選択できるのではないかと考える。

学習指導要領では、育成すべき資質・能力として「思考力・判断力・表現力等」と示されており、保健教育においても生徒自身が健康課題を自分事として捉え、思考したり、判断したりして、適切な意思決定をし、行動化につなげることが求められている。また、ヘルスリテラシーの研究では、日本人は得た健康情報をそのまま活用する傾向があることから、情報を評価し、自ら意思決定する力を向上させることが必要だと指摘されている[2) 3)]。このことは、私たちの授業実践における課題である、知識や情報としては理解しているが、自ら意思決定し、主体的に行動に移すことができていないことと共通しているとも言える。

以上のことから本研究では、健康的な行動を選択するために必要な能力を育てる上でヘルスリテラシーの向上を目指し、意思決定に重点を置いた授業を行うことが効果的であると考え、本研究主題を設定した。

６　研究の方法と内容（深い学びの技法と学習過程に関して）

本研究では、「睡眠」を題材にして、正しい健康情報に基づいて意思決定するヘルスリテラシーの向上とともに、健康行動における理解しているが実践できていないことへの気付きから、課題解決に向けた対話的な活動によって、個人の価値観の確認や、新たな視点を獲得したり、意見を比較したりして深い学びへとつなげる。

ヘルスリテラシーの４つのプロセス「入手・理解・評価・意思決定」を基に、よりよい意思決定のために既習の知識や信頼度の高い情報を選択肢として、それぞれの選択肢の長所や短所を考え、評価する「よりよい意思決定のプロセス」を取り入れ、意思決定のスキルの向上を目指す。よりよい意思決定のプロセスを経ることによって、多面的で多角的な見方や考え方へとつながり、自分の生活や価値観と照らし合わせながら他者と関わり合う中で深い学びへと導き、自己の考えを再形成し、実現可能な意思決定へと促したい。

7　研究の成果と課題

成果としては、１年次に実践したヘルスリテラシーのプロセスを基に調べて得た信頼性の高い情報を選択肢として活用したことが、個人や班活動において新たな視点や選択肢の発見となり、よりよい意思決定のために効果的だったと感じる。また、課題別での班活動は、知識や視点を共有できるだけでなく、自分事として考えやすく考えを深化させることにつながり、その生徒なりに実現可能な意思決定へと近づけることができたと感じる。さらに対話的な活動で選択肢の長所・短所を考え、評価するよりよい意思決定のスキルを取り入れることにより、自分の課題や改善策について気付きを得たり、多面的に物事を考えたり、自己の考えを深めることができたのではないかと感じる。１年次の課題から、本研究の実践だけではヘルスリテラシーの向上や深い学びへつなげることは困難であったため、情報リテラシーについては技術科で実施する等、関連教科と連携し、実践することができた。そして、私たち養護教諭にとってヘルスリテラシーの向上を意識した授業実践に挑戦した本研究は、新たな知見を得ることができ、深い学びへとつながる機会となった。

課題としては、ヘルスリテラシーを取り入れた対話的な活動につながるようにするためには、知識や情報があっても実践できていないことへの葛藤やジレンマが生まれるような題材や、具体的に考えられるような学習課題や発問の工夫が必要だと感じた。意思決定のスキルの習得や仲間の意見を聞くだけでなく、思考を再形成し、よりよい意思決定へと促すための手立てや学習課題とまとめの整合性については、今後も検討していく必要性を感じた。

8　運営の成果と課題

コロナ禍の県中教研の事業の停止により、県中教研学校保健部の指定研究期間と市中教研学校保健部の役員任期に不整合が生じた。それに伴い、市中教研学校保健部との研究テーマ、研究内容と連動できない事態となった。このことについて、事務局へ相談したところ、県中教研のローテーションを見直していただけることになり、次回からこのような状況は改善されることになった。

今回はこの不整合のため、実質３年間の取組となり、２年間は市中教研学校保健部全体（６地区）で取り組んだが、今年度は市学校保健部と研究テーマが異なるため、１地区（東区）だけで引き続き県中指定研究の取組を進めることとした。

成果としては、教師の主体的な学び合いが実践されていたことである。特に、研究発表会までの研推会議では、何度も指導案検討を行ったり、プレ授業を複数回行ったりと、研推委員間での練り合いや練り上げが行われた。研究発表会のグループ協議では、KPT 法を用いて教師の学び合いを行った。改めて、生徒だけでなく教師側もこのような話し合い活動をすることで、チームワークが強化され、深い学び合いになると感じた。また、研究会当日は、新潟地区のみならず県外や他地区から多数の参加者を得て、新潟地区の研究成果を広範に発信することができた。

課題としては、どうしても研究活動における負担が担当役員に集中してしまい、日常の学校業務に加えて仕事量が大きくなってしまうことである。役割分担や ICT 活用、研究テーマの工夫など、持続可能な研究組織の構築が必要である。

1）福田洋・江口泰正（2016）『ヘルスリテラシー　健康教育の新しいキーワード』大修館書店
2）（公財）健康・体力づくり事業財団（2019）「特集　子どもたちのヘルスリテラシーの育成」
『健康づくり』,6,（494）, 2-7.
3）中山和弘「ヘルスリテラシーとは：健康・医療情報を活用し、豊かで幸せな生活を実現する力」
『陽だまり』(https://www.mitsui.com/wellness/174/)（2024.3.22 現在）

資　料

1　部会名　学校保健

2　郡市名　新潟地区　　3　会場校　新潟市立東石山中学校

4　研究会開催期日　令和　7　年　11月　13日（　木　）

5　研究推進委員会

役　　割	所　属　・　職　名	氏　　名
(1) 指導者	新潟青陵大学大学院　教授	塚原　加寿子
(2) 研究推進責任者	新潟市立新津第一中学校　養護教諭	渡邊　秋子
(3) 会場校責任者	新潟市立東石山中学校　教頭	土田　知之
(4) 県･郡市指導主事	新潟市教育委員会　指導主事	高橋　哲子
(5) 研究推進委員(授業者)	新潟市立東石山中学校　養護教諭	上野　雅
	新潟市立濁川中学校　校長	武田　統理
	新潟市立黒埼中学校　校長	大橋　正治
	新潟市立白根北中学校　養護教諭	武之内　聡美
	新潟市立宮浦中学校　養護教諭	三冨　明美
	新潟市立藤見中学校　養護教諭	松本　恵
	新潟市立東新潟中学校　養護教諭	本間　美和子
	新潟市立大形中学校　養護教諭	鈴木　裕美
	新潟市立石山中学校　養護教諭	金　美千子
	新潟市立木戸中学校　養護教諭	永井　明子
	新潟市立下山中学校　養護教諭	加藤　穂乃佳
	新潟市立東石山中学校　教諭	渡辺　政子

6　研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/19　宮浦中学校	5	指導案検討（研推委員５名）
2	5/28　東石山中学校	6	研究会会場校へ挨拶、打ち合わせ等 （会場校校長・教頭・授業者・研推委員３名）
3	6/10　藤見中学校	10	指導案検討（研推委員 10 名）
4	6/13　白根北中学校	3	運営の打ち合わせ（研推委員３名）
5	7/10　下山中学校	11	下山中養護教諭によるプレ授業（顧問校長２名・研推委員９名）
6	7/17　医科学センター	12	プレ授業協議会（顧問校長２名・研推委員 10 名）
7	7/28　白根北中学校	3	運営・研究誌原稿作成の打ち合わせ（研推委員３名）
8	8/ 5　藤見中学校	9	指導案検討（研推委員９名）
9	8/21　東石山中学校	5	会場校打合せ（会場責任者・授業者・研推委員３名）
10	10/ 1　宮浦中学校	5	指導案検討（研推委員５名）
11	10/14　東石山中学校	11	授業者によるプレ授業、最終打合せ（会場責任者・授業者・名研推委員９名）
12	10/30　東石山中学校	7	授業者によるプレ授業（授業者・研推委員６名）
13	11/ 6　東石山中学校	5	会場確認（会場責任者・授業者・研推委員３名）
14	11/13　東石山中学校	84	２年次研究発表会（新潟市中教研学校保健部一斉研兼ねる）
15	12/ 5　白根北中学校	3	研究のまとめ・成果と課題（研推委員３）

7　研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	（　８４　）名	(3) 小学校・高等学校教員	（　２　）名
(1) 郡市内中学校会員	（　６４　）名	(4) 教育委員会・センター	（　１　）名
(2) 他郡市中学校会員	（　１５　）名	(5) その他（大学教授・県外）	（　２　）名

8　公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
２年２組	学級活動「自分に合ったよりよい睡眠習慣を見つけよう」	養護教諭　上野　雅

9　全体協議会

協議題	指導者	司会者	提案者
①対話的な学びやヘルスリテラシーの意思決定のプロセスを取り入れた活動は、自己の考えを深めるために有効であったか。 ②自分の生活や価値観を振り返り、実現可能なよりよい意思決定となっていたか。	新潟青陵大学大学院 看護学部看護学科 教　　授　塚原加寿子 様 新潟市教育委員会 保健給食課 指導主事　高橋　哲子 様	新潟市立宮浦中学校 養護教諭　三冨明美	新潟市立 白根北中学校 養護教諭 武之内聡美